

■ 特集 ■

2018年度先端社会研究所シンポジウム（共催：社会調査協会）講演録

題 目：質的調査における〈現実の多義性〉と〈解釈の複数性〉

－矛盾と葛藤のなかの認識枠組み生成の現場から－

講 師：荻野 達史 氏（静岡大学）

渡辺 拓也 氏（大阪市立大学、社会理論動態研究所）

コメンテーター：阿部 真大 氏（甲南大学）

伊藤 康貴 氏（長崎県立大学）

日 時：2019年3月19日（火）14:00～17:00

場 所：関西学院大学梅田キャンパス 1405号室

司 会：三浦 耕吉郎（関西学院大学）

趣旨説明

今回の研究会では、研究者が実際にフィールドで、認識枠組みを変容させたり、異なった認識枠組みにであったりするプロセスに注目しながら、いったいどのように〈現実の多義性〉や〈解釈の複数性〉と格闘しながら（もしくは、折り合いをつけながら）調査結果を作品化していくのか、といった点に力点をおいていく。研究会の進め方としては、豊富なフィールドワークのご経験があり、すでにエスノグラフィーを刊行されているお二方に30分ほどご報告いただき、それぞれ研究領域の近いコメンテーターの方からの発言をはさみつつ、フロアー全体でお二人の知見や問題提起を共有していくことをめざしたい。

○司会（三浦） ……よろしくお願いします。

まず、今日のテーマですが、「質的調査における現実の多義性と解釈の複数性」、副題が「矛盾と葛藤のなかの認識枠組み生成の現場から」という、非常に面倒そうというか、わかりにくい題になったかなと思ったんですけども、でもこれだけの方が来てくださってうれしく思います。

何を言いたいかという、簡単に言えば、質的調査という研究をしている我々が、その調査の中で、現場で、あるいはそれを原稿にする場で、一体何をやってるんだらうということなんです。恐らく量的調査の人たちも、質的調査の人が一体頭の中とか現場で何をやってるのかということについて、かなり違ったことをやってるんだらうなと思いつつ、でもよくわからないみたいなどころがあるかと思います。それで、今日はこの2冊の本を書かれた著者の方に来ていただきました。

まず最初に発表していただくのは、荻野達史先生なんですけど、『ひきこもり もう一度、人を好きになる 仙台「わたげ」あそびとかかわりのエスノグラフィー』というご著書があります。それから2番目のパネリストは渡辺拓也先生で、『飯場へ 暮らしと仕事を記録する』という本をお書きになっています。この御本を書かれた2人の方に、まずこれだけのものを書かれたわけですけども、でも、まだまだ書いてないことがいっぱいあるんじゃないかという、そういう僕なりの感触があって、ぜひこの本を書くための、書くまでの裏話を聞きたいと個人的に思って、このようなテーマを設定させていただきました。

それで、とくにメイキングのプロセスを見ることによって、僕らがまだ知らない質的調査のもっと奥深いものが見えてくるんじゃないかなということで、実は1カ月前に、今日のパネリストの方とコメンテーターの方と準備会をしました。そのときに、すごく僕はある意味で驚きというか衝撃だったのは、お二人ともフィールドワークとか参与観察をされて、そしてエスノグラフィーを書かれてるんだとばかり思ってたんですね。

どうしてそう思ったかという、荻野先生は本の副題にエスノグラフィーと書いてあるし、渡辺先生も今日の演題が「私エスノグラフィー」ですからね。だから、お二人ともエスノグラフィーをやるかと思ってるんだらうと思ってたら、何かエスノグラフィーと言われるもののご自身の研究の距離感というのをすごく強調されてました。これはひとつ僕としてはすごく驚きだったですね。じゃあ一体何なんだろうということ、決してエスノグラフィーの書き方の話ではないんですね、今日の話は。

それで僕の予感的に言えば、荻野さんや渡辺さんにとって、これを書くことが、社会学というもののへの内在的な問いかけになっているというんですかね。社会学というものを、たんなるエスノグラフィーという文脈からじゃなく、むしろ、フィールドワーク、参与観察、観察という方法によってさらに深めていこうという目論見が、どうもあるようなのです。ただ、もう一つ、質的な方法としてはインタビューという方法があるんだけど、このお二人はインタビューだけでは社会的な研究は深まらないということも強調されてました。それっていったいどういうことなんだと、皆さんの関心が盛り上がったところで、僕の前置きはこれで終わりにしたいと思います。どんな話が出てくるか楽しみにしてほしいと思います。

それで進め方なんですけれども、まずパネリストの荻野先生に30分話していただきます。それから、その次に、続いて渡辺拓也先生に30分話していただきます。それで、基本的にわかりやす

いお話なので質問はとらなくてもいいかなとも思いつつ、どうしても今聞いておかないとこの先がわからなくなるというような質問があったらちょっとだけ受け付けたいと思いますが、基本的には続けてお二人の話を聞いて、その後、コメンテーターの阿部真大先生と伊藤康貴先生にコメントをしていただきます。

阿部先生は、御存じのように『搾取される若者たち—バイク便ライダーは見た』とか、そういう代表的な研究があるんですけども、若者文化とか労働問題というところの御専門でられます。それから伊藤康貴さんは、ひきこもりに関する当事者研究というのをやられています。そういうお二人のコメントを聞かせていただきつつ、でも単なるコメンテーターではなくて、半パネリスト的な形で独自の見解を述べていただくようお願いをしております。

その4人のお話を聞きながら、それが前半なんですけど、今日皆さんの手元の中の下に質問コメント用紙が入っているかと思います。これはパネリスト、コメンテーターのお話を聞きながら、質問したいこと、あるいは何かコメントがあればぜひ書いていただいて、4人の方が大体話し終わるのが3時45分ごろを予定してますので、それから15分休憩をとります。その15分の間に提出をしてください。できるだけ早目にこの用紙に質問等を書いて、こちらに提出していただきたいと思います。それをもとに4人の方々に応答のお話をさせていただくと。その後、あとはフロアとこちらで自由にディスカッションが行えればいいなと思っております。

それでは、そういうことで、これから最初のパネリストである荻野先生にお話をさせていただきたいと思います。レジユメがあると思いますけれども、題は「[多義性]の縮減と保存のあいだで～理論化・関係性・文章作法～」という題でお願いしたいと思います。

○荻野 本当に貴重な機会をいただきましてありがとうございます。何でお声をかけていただいたのかなと正直不可解だったのですが、同じシンポジウムで2年前、「ライフヒストリーとライフストーリー」のシンポジウムがあったときに、私がパネリストの西倉先生に余計な質問をして困らせたというのがあって、そこでどうも三浦先生に記憶されてしまったからではないかと思っております。

今、本のタイトルを述べていただきましたが、この本のタイトルがいまだに小っ恥ずかしくて、人に言えないんですね。もともと編集者の方とタイトル決めながらやっていったときに、私は副題のほうをむしろメインタイトルにしたいなと思ったんですけど、いや、こちらだということで、人を好きになるという、聞き取りをした方の言葉をそのまま、ちょっと変えただけで使わせていただいております。

今日お話しさせていただくのは、もともと今日、このカラフルなチラシのところにあります趣旨説明とかシンポジウムのサブタイトルから言うと、結構この企画と逆行するようなことも言おうとしてるのかなと思ひまして、その辺をできるだけわかりやすくお伝えできればなと思っております。

さて、それで初めに、本の概略も少し説明したほうがよからうというお話に打ち合わせでなりまして、簡単に説明させていただきます。

この本は、97年からずっと支援活動を行ってる支援団体にしつこく張りついて書いたものということになります。ここは初め50代の女性2人だけで細々と始めたんですけど、今は非常勤の方も含めると、実にスタッフ40人の大世帯の支援団体になっております。

私が2001年からフィールドに入りまして、2010年前後ぐらいまで目まぐるしく支援メニューを拡張させ、スタッフはふえ、利用者はふえという形で、本当に行くごとにいろんなところが変わっていくという、もう本当に雑然と言ったら申しわけないですけど、非常に混沌とした集団だったと思います。

私はちゃんとした質的研究の教育とか訓練を全然受けていない人間です。一番初めに調査として訓練を受けたのは、地域政治研究をやってる先生のところについて、ひたすらいろいろ地域のもめごとについて聞き取ることをやったときがあるんですけど、フィールドノートをちゃんととるとか、そういう正式なことをちゃんと学ばずにきました。ただインタビューに行ったらそのままなし崩し的に中に入れてもらえてしましまして、ちょうど当時できていた民家を借りた寮というのがあって、いわゆる共同生活の場なんですけど、その寮の一部屋にいつも転がり込んで、ずっと寝泊まりしながら、遊んだりとか就労訓練といえど訓練かもしれませんが、草むしりに行ったりとかサッカーしたりとか、そんなことをひたすら繰り返していました。でも、さすがにこれはこれでちゃんと記録にとらないといけないんだろうなということで、初めから一応ノートはとっていたんですけど、徐々に徐々にやっていったという感じです。

インタビューもかなり本では使ったんですけど、実は、実際にレコーダー回しながらインタビューしたのは入り始めて2年たってからです。それまで何やってたのかという感じなんですけれど、当時を思い出してみるときに、何か自分の中におっかなびっくりする部分があったんですね。何かそんなに聞いてしまっているのかと。

それからもう一つは、入って行動をともにして、ちゃんと調査者だということは明かしてるんですが、その人間がいきなりレコーダーを回して話を聞くということに、非常に私自身の勇気が要ってしましまして、実際に2年後ぐらいから随分見知った利用者ですとか、メンバーさんと呼んでますけど、メンバーの方なんかレコーダーを回して話を聞くと、何か今さらこういうことをやられるとびっくりしますねとか言われながら聞き取りを始めたことがあります。ただ、メンバーさんに限らず、スタッフはもちろんですけど、いろんな方にお話を聞きました。あとは文書資料をひたすら集めていました。

これは本書の概要とは直接かわりないですけど、後の話とかかわりますので少しお話ししますと、何で本を書いたのかということに関しては、調査を始めて2010年とか2011年ぐらいまでの間に、このフィールドで少なくとも五、六本は論文は書いてはいたんです。ただ、後でお話しするように、何かちゃんと書いてないなというか、非常に不全感というか不満が残りました。それで、やはりもっとちゃんと一定の方向で書いてみたいなという部分がありました。これは理論化にかかわる、本日のサブタイトルには理論化とつけましたが、理論化の問題だと思います。

もう一つの大きな動機づけは、代表の秋田さんという方がいらっしゃるんですけど、秋田さんから2009年に、ちょっと紆余曲折あった末に、やっぱりわたげの本を書いてほしいと、記録を残してほしいというふうに依頼を受けまして、私としてももちろん非常にありがたい話なので書かせていただきました。ただ、ここは少しねじれもあります。これは関係性にかかわるお話だと思います。

それで、本を書くときは、想定する読者をどうするかというのは大きな問題だと思いますが、こ

の本は基本的には一般書です。エスノグラフィーといえるかどうかについては、その後さらに悩ましいものになってしまいますが、当初は結構研究書的な意味も半分ぐらいだと思っていたんです。ですが、自分がここで書きたいように書くとなると、どちらかというとノンフィクション的なものとか読み物の感じになっていくのかなということで、編集者ともそういう話になっていきました。

ですから、ここに書きましたように、いわゆる研究者にというよりは関心のある一般の方々ですとか、あと、結構自分の中にあっただのは、その支援施設の若手のスタッフに向けて書きたいなというのがありました。それは要するに、どんどん団体として拡張して変わっていくなかで、初めのころの話というのはだんだん現場のスタッフにもわからなくなっていくんですね、何でもこういう形になっているのか。それからスタッフの性質も変わってきます。当初は、とにかくやる気でやりたいと入ってくるスタッフが多んですけど、その後、だんだん拡張してくるに従って、例えば福祉大学からそのまま卒業して一つの就職口として入ってこられる方も多くなりますし、いろいろ温度差もあるんですね。その中で、なぜこんなふうな形でやってるんだらうかということがわからなくなってくるということもありまして、もちろん長い付き合いのスタッフもそうですけど、今後また入ってくるであろうスタッフにも何か伝えたいなという思いがありました。

エスノグラフィーということについては、それほど学術的なものであろうかという気持ちも半分。でも、やっぱりエスノグラフィーというしかないのかな、そう言いたいなという思いも半分ということで、結局サブタイトルに入れてしまったというところがあります。

書いてあること、これは簡単に済ませます。いわゆる投稿論文とか査読論文の中では書けないような、ある種の風景みたいなものを書きたいとか雰囲気を書きたいとかという部分もありました。その中で、ある程度概念化していくといいますか、理論化していく部分ということも含めて概念的部分と書きましたが、こちら辺はそれぞれの支援メニューですとか、ある局面についての一定の概念化を施したものとえば言えますけど、非常に緩やかなものだと思います。

それで、本を構成する要素として書いたものというのは、支援メニューとか運営ですね。それから福祉制度との関係とかもありますけど、結構この辺の風景とか、日常的な過程とか支援の微細な方法ですとか、あるいは私自身が経験したいろんなエピソードを書き込みました。それから、これは特に観察で書けるところに対して、ある程度、やっぱり本当のところ、例えば利用者の方はどう思ってきたのだろうかと考えたときに、スタッフも含め、意味の世界というものをちゃんと書きたいなというのがありまして、補強する形で聞き取りも増やしました。

実のところ、ひきこもりの支援団体についての本は、私が書く以前にももちろんあったんです。ただ、私から見ますと、どうしても代表者の語りがすごく前面に出ちゃうんですね、その種の本は。代表者の語りがまず先に長くあって、ひきこもりとはこうなんだとか、現代社会はこうなんだという話があって、それから結構ざっくり支援方法について触れられて、そこにちょっとしたケースがちょろっと加えられて、何となく、すごくうまくいっているという感じの印象を与えて終わりというのがどうも強いですね。確かに、民間支援団体の代表者って結構強烈なんですよ、みんな。すごくキャラが立つといいますか、本当にその方を描くだけでも十分おもしろいといえばおもしろいんですけど、でもやっぱり基本的に支援というのは、利用した方がどうそこを受けとめていくかということが大きいことだと思いますので、どちらかというとそちらのほう、当事者の人も

もちろんですし、当事者の家族ですね、親御さんのお話なんかも、なるだけ多く載せたいと思いました。

このシンポジウムのタイトルや趣旨に照らしての前置きということで書いているんですが、先ほどお話ししましたように、この趣旨にどのくらいちゃんと即しているかというのが非常に不安で、一応こういう図をつくってみました。どういうことかといいますと、もともとのシンポジウムの趣旨からしますと、要するに、現実の多義性があるって解釈の複数性の可能性ももちろんたくさんある中で、いかにある種の認識枠組みを形成するか。基本的には理論形成だと思います。そこが問題だということで、それについての言ってみれば裏話といいますか、苦労話をするというのが本来的な趣旨だと思うんです。

ですが、もう一つの趣旨の中にある、理論化、認識枠組みを作るというものと、何かを書くという、作品化するというところでみると、私の中で多分何か分裂が起きてるんですね。理論化と作品化というのが必ずしも一体化しないというところが私の中にありまして。理論化ということに関してみると、査読論文をいくつか書いて理論化してやってきた中で、逆のベクトルですね、余り理論化したくないという思いが結構実は強かったと思います。ですから、脱理論化とか別に格好つけて言う話でもないんですけど、理論化をしちゃわないというか、整理や説明ができない部分を残した形で書きたいというのがどうも本音としてあったと思います。

だけれども、その一方で、作品化するといったときにはいろんな問題がかかわってきて、そこには、後でお話ししますが、ある種対象といいますか、フィールドの方と、特に代表者との関係というのがあったんですけど、その関係性というのがすごくそれなりに影響を与えていますし、それから、作品化に関しては文章作法、ヴァン・マーンンの言葉を使っていますけど、要するに文体というのもすごく大事な要素だなと思います。ですから、その辺の話はこれからお話しさせていただきたいと思っています。

あと、エスノグラファーの課題というのを文化人類学の小田さんが非常にシンプルにわかりやすくまとめて言ってくれて、これはこれで使いやすいので、これから使わせていただきます。要するに、エスノグラファーの課題というのは、(1)として現場を伝えること、(2)として現場の捉え方を伝えることであるという形で、教科書で書かれています。理論化に当たる部分が現場の捉え方を伝えるということなんですが、基本的に(1)と(2)は決して本当は矛盾するわけではないはずなんです。ただ、どうもこここのところが素直に、(1)を十分にやれば(2)になるとか、(2)を十分にやれば(1)になるとかというわけでもどうもないんじゃないかなというのがありまして、このあたりのことは、後でもお話しさせていただこうと思います。

それで、とはいえ、まず理論化ですが、私がこの本のなかで何もしなかったかといったらどうもそうではないと思います。ですが、この本をつくるときのメモですとか、編集者とのメールとかを見直してみますと、途中の段階では本当にびっくりするぐらい理論化の意図が薄いんですね。本当にベタな記述だけしようと思っていた節が結構ありました。

ところが、そういう形で、何か物語調みたいな形で書き始めたんですが、実際のところは、書いてる過程でやっぱりそうはいかなかったんですね。この後でまたもう一回お話ししますが、やはり一定の概念化とか理論化というものを全くなしにして書くこともできないし、書く勢いも得られ

ないしということ、徐々に緩やかな概念をつくっていくことになります。

それは多分、データをずっと見ていく中で、やっぱりこういうことだったんだとか、ここはアクセントを付けて書かなきゃいけないという確信というのは、やっぱり、その場にずっと見てきたなかで、あるいは長い関係ができて、それぞれの人の辿ってきた道程みたいなものについて、自分なりに強く思うところもあって生まれてきたからだと思います。同じことは、インタビューデータを読む過程でもあって、in vivo code ってことになるかもしれませんが、かれらが話す言葉をそのまま使ったり、つき合わせたりしながら、基本的にはこういう形でいろんな局面をまとめていったらいいだろうというところがあったと思います。

その結果、初め全然考えもしなかった第7章は、すごいベタな話なんですけど、サブタイトルに使った「あそび」と「かかわり」というものについて、これはこれで抜き出して1章をつくってしまおうということにしました。ただ、余り学術的な補強とか全然していないので、危なっかしいと言えば危なっかしいところです。

時間のことがありますので、簡単にここら辺は済ませましょう。これは飛ばしていいです。後でお話をします。

今日の論点として、現実の多義性っていうものに関して保存するか、縮減するというか、この間で結構揺れたといいますか、そこが大事で悩ましいところです。ただ、この多義性という言葉が物すごく多義的で、すごく混乱を招くと思います。通常、例えば羅生門的手法ではないですけど、多義性という言葉で、多分一番使われるのは、同一の出来事や過程に、その場に居合わせた人たちが実は結構みんな違う解釈をしている程度、それが多分、それが通常が多義性なんじゃないかなと思います。

ですが、私が向き合った一つの多義性というのは、フィールドでももちろんあるわけですけど、ある種のカテゴリーをめぐってフィールドの外で生じている多義性でもあったわけです。例えば私の本で言えば、「若者問題」とか「ひきこもり」とか、あるいは「居場所」とか「就労支援」というものについて、やっぱりいろんな立場があって、例えば居場所なんかあるだけ無駄だという人もいますし、逆に就労というものをクローズアップすることに対する強い異論もありますし、本当にいろんな立場があります。そこら辺が私にとっては大きな多義性だったなと思います。論争的な状況といってもいいと思います。

それから、もう一つ、私の中で多義性といっているのは、研究者の解釈自体も含まれていると思います。例えばインタビューデータを読んで、これをどう解釈するかということもあるんですが、それだけではなくて、結構大事だったのは、対象をどう切り分けてどこに優先順位をつけて取り上げるかということ自体が、私にとって結局解釈の複数性の出発点だったんじゃないかなと思います。だから、要するにより細かいところについての解釈ということもあるんですけど、もともと何でそこを選んだのか、何でその部分を描かないのか、そうしたことも解釈の複数性にかかわってくるかなと思います。この辺あたりのことは、先ほどお示した論争的な状況からも結構影響されていたんじゃないかなと思います。

理論化についてお話しますと、通常、理論化というのは、例えば投稿論文的な作法といって決めつけることはできないんですけど、自分の経験だけで物を言ってしまうと、特に2万字ぐら

いの制限のある中で、一定の質的研究で物を書こうとすると、青写真といいますか、設計図ががちりしたものがあって、最小限の引用とか描写をしながら結論に向けて書かないと絶対に収まらないですね。

ですから、基本的には非常に明瞭で、しかも基本的には査読者とかに対してほかの解釈がないというような形で戦略的に書かざるを得ないというところがありまして、こういう部分がすごく、特に投稿論文的な作法としてはあるなと思いました。

あと、提示する理論というのは、やっぱり既知のものより未知でなければいけないし、ある種の社会学的な概念も含めたひねりがなきゃいけないということで、何か余りベタなものを書けないということも、個人的な思い込みも多分に入ってると思いますが、そういうところもあったと思います。ですが、それでこの本を書けるかというか、書きたいとは思いませんでした。

例えばヴァン・マーネンは文章作法として3つぐらい類型つくってますが、写実的物語というのは、まさに投稿論文に相当するものだと思います。それに対して私がこの本で考えたのは、どちらかという余り社会学的な理論らしからぬもので書いてしまえということでした。例えば人との関係が大事だよとか、人間遊ぶのも大事だよね、そんなことです。よくある話しといえばそれまでです。でも、そこは意外とそう簡単なことでもないということを書きたいというところがありました。

この辺は、実は支援政策的な問題もありまして、結構中心的に書いた居場所というのは、長らく厚労省の規定の中で予算がつけられてきませんでした。基本的には、自動的にはつかなくて、自治体といろんな形で交渉しながら初めて予算がつけられるような状況であったわけですね。私はどちらかという、そこら辺を少し変えたいという思いもありました。ですから、あえてベタな話をしたいというのがあります。

そのところを伝えるためには、何かその重みとか痛切さみたいなものを書かなければいけないなと思ってました。ただ、この辺はそれなりにいろんな形で手をかえ品をかえ、人の話も取り入れたりと、いろんな場面を取り入れながら書かないと伝えにくいな、伝わらないんじゃないかなという部分もありました。

これはちょっと飛ばします。

それから、もう一つ書き残しておきたかった部分があります。解釈としては最後まで裏のとれないといいますか、データの十分補強できないものが結構あるんですね。だけれども、この問題に関してある程度想像力を働かせて、どういうことなんだろうか、そこら辺が結構いろんなことを考える上でも資料的にも意味があるんじゃないかと思うようなものもありまして、そこで理論化とかモデルの中にはちゃんと入らないんですけど、何らかの形で書き残しておきたい、書き加えたいというのがありました。何でも書くというわけではないんですけど、そこら辺はある程度残しておいた方がいいんじゃないかと思うようなものを、私の判断ですけれど書き入れています。

これは幾つかの例ということですが、これはちょっと飛ばします。

あと、関係性のあり方と多義性の扱いということなんですが、これは極めて私のすごく個人的な出来事だと思います。だから、余り一般性はないかもしれません。どういうことかという、民間支援団体を対象にしたときに、少なくとも2000年代の初めからずっとかかわってる中で、私がひ



どく囚われてしまった部分があると思うんです。それは何かといいますと、まず民間支援団体というのは、特に医療関係者から見ると非常に怪しい存在でした。特に権威のあるところから見たときに、民間支援団体は非常に勝手な思い込みで結構勝手なことをやってる、場合によっては危険なこともやってるという存在でした。それから民間支援団体の中でも、またすごくいろんな立場があって、あっちよりもこちらのほうがいいという、それはお互いあるんですね。

この中に入っていくと、特に支援団体の名前出して、その団体について本を書こうとすると、自分の中で、何かすごく有効な支援をしている、さらに言えば、ほかに比べて有効な支援をしているところと書かなければいけないような、何か思い込みで囚われるんですね。ですが、私も行き始めの頃は、つき合い始めた人たちがどんどん元気になっていってという中で、これはすごいなと思ってるんですが、そのうち結構いろんな問題が起きてきます。それは、例えば就職できないといったことだけの問題ではなくて、ある種の問題行動は問題行動で、すごくいろんなことが起きる中で、私の中で、ここはこのままでいいのだろうか、この状況でいいのだろうかというふうに思い始めたんですね、何年か経って。

で当初は、いずれわたげについての本を書きます、書かせてくださいと言ってたんですが、だんだん書きにくいと思うようになったんです。そのうちに2007年ぐらいですかね、その代表の秋田さんが、あるとき地元のライターさんという人を連れてきて、私たちの本はこの人に書かせますということがありました。要するに、幾ら待ってもあなた書かないじゃないというのがあったんだと思います。私としても、ああ、これはもうしょうがないなと思いました。そういうこともあって少し疎遠になった時期もあるんですけれども、決して関係が切れたわけではありませんので、ちょっと間隔はあいたんですけど、一年半ぐらい経ってまた行ったんです。

そうしたら改めてわたげの本を書いてくれと言われたんですね。私としてももちろん書きたい思いはあったんですが、後から振り返ってよかったと思うのは、このときにちょっと距離を保てるようになったんでしょうね。それで、あまりヘンに礼賛したような本を書く必要もない。シンプルに内在的に、どういう論理とどういう経緯の中でこれをやってきたのかということ徹底して内在的に書けばいいと。特に他のところと比べて有効だとか、はなから証明もできないことに気をとられる必要はないんだなということを思ったら、結構、楽になって書けるようになったというのがありました。

それから本のために再調査をやってる中で、改めてわたげという団体が、何年間かの間にさらに充実させた部分とか、私がちゃんとわかってなかった部分なんかも見えてくるということも多々あったと思います。

それで・・・、これまでお話ししたみたいに、一方で、私は査読論文的なすごく解釈を限定したような形で、非常に少ない字数、紙幅の中で限定されたことを書くということに対して、むしろ多義性を積極的に保存したいという思いがありました。だけど他方で、ただ羅列しても当然読み物にならん、読んでいただけないと。ですが、基本的には、いろんな要素を読者の方に丸のみしていただきたかったんですね。通して読んでいただきたいという思いがありまして、ですから、やっぱりここでは多義性というものを単におちまけてはいけなくて、何らかの形で読み物として読んでもらうものでなければいけない。さらに、どこにアクセントがあるのかということも、そこはそこで支

援団体の特性も踏まえてちゃんと書かなければいけない。いろんな要素を含みながら、でも、どうにか読み通してもらえるものにせねばと考えました。

ヴァン・マーネンの中に「印象派の物語」というのがありまして、言ってみれば「怒濤の物語」を書けというんですね、1つのやり方として。読者がアクション映画を見るように、どうなっちゃうんだろうって読むような読み物をつくればいいというような話があります。そうすればいいというわけではないんですけど、そういうものもあると。マーネンが示しているのは、自分の警察でのフィールドワークで、犯人の追跡劇の一幕を書いているのがあります。もちろんひきこもり支援機関でそうした派手な出来事はまずないです。でも、人に読んでもらえるにはどうしたらいいかなというふうに考えて、結果としては変な表現ですけど、「何かと寄り道してあれこれいう私」を入れることにしました。まず「私」をそれなりに書くことにしました。

これをしたことによって結構得られたものがあるって、1つは、なるだけ身近で語るというんですかね。出てきた人が、なぜこういう小さいことで痛むんだろう、なぜ小さいことで喜ぶんだろうとか、そういうことについていろいろ自分なりに考えたことを書くといったときに、余り距離感のある形だと書きにくいんですね。結構、自分を書き込みながらというのが比較的やりやすかったです。

それから、あと、いわゆる専門家らしさにこだわらずに書けたということも1つメリットだったかなと思います。実際にとくにフィールドにいるときには本当に「ただの普通の人」です。ちょっとしたことでもびっくりしたりします。だから、その私を書いてしまうことによって、全体的にヘンに偉そうに書かないで済むというところはあったと思います。

それから、これは賛否両論だと思うんですけど、通読していただけるときにどういうふうにかこうかと考えて、飽きのこないペースで話を入れかえていくことにしてみました。エピソードを書いている一般的な支援論を書いて、またエピソードに戻ってという形で、すごい細かく話がモザイク状に入れ込んであります。これに関して、例えばこんな感想を寄せてくれたある出版社の人がいました。こうしてぐねぐね寄り道しながらでないと伝えられないこともあるんでしょうねと。

ですけど、同業のある研究者には、あんたのこれは読めたもんじゃないと、途中で投げ捨てたというふうに言われたこともありまして、ですから、ちょっとその効果というのは本当のところどうなのかというのは私の中でも測りがたいです。とにかくこういう形で書いていったということになります。

すみません、大変時間を超過しました。終わりたいと思います。(拍手)

○司会 ありがとうございます。もしも、このことだけは今質問したいという方がおられたら、荻野先生に何か質問受けますけれども、ないようですね……。ちょっと一言言っていいですか。僕、余り理論化ということを趣旨文では言ってないんです。

○荻野 そうですか。すみません。じゃあ、それは私の思い違いです。

○司会 じゃあ次に、渡辺先生、よろしく願いいたします。

○渡辺 渡辺です。今日はよろしくお願いします。私もスライドを用意したかったんですけど、先週引越しをした疲れが出たのか風邪をひいてしまって、全く用意する余裕がありませんでした。説明が下手なのでスライドがあったほうが絶対いいんですけども、紙資料のみの報告になってし

まいりました。御容赦ください。

私の報告は「私エスノグラフィーの向こう側-参与観察の20年」というタイトルをつけさせていただきました。余り演繹的な説明ができないので、基本的にはこの本を書き上げるまでの経緯にそってお話ししたいと思います。

それから、サブタイトルを参与観察の20年としたんですけれども、これは20年かけてこの本を書いたというわけではなくて、私がフィールドワークを始めた少し前ぐらいから質的調査やエスノグラフィーといったものに対する関心が高まって行って、著書もたくさん出ていたと思うんですね。質的調査法の本も出ていて、そういったブームの中で、フィールドワークを始めた自分がいろいろ書き上げるまでにぶつかっていた疑問とか壁とかといったもの、そして解決の過程といったことを報告させていただきたいと思います。エスノグラフィーや質的研究ブーム以降の20年を過ごす中で、果たして同じようなものを皆さんが見てこられたのか、どういうふう感じてこられたのかということをご共有できたらと思います。

まず、報告タイトルの「私エスノグラフィーの向こう側へ」というところなんですけれども、私エスノグラフィーという言葉についてはあとで触れるとして、まずフィールドワークに出かけたきっかけについてお話ししたいと思います。

高校生のときに、高校生の考えることですから素朴な疑問なんですけれども、自由とは何だろうということを考え始めました。大学に入ってからこの問いにこだわって、社会学という学問をやって何か答えを出したいと思っていたんですね。いろいろなテキストを読んでいったんですけれども、なかなか答えがわかったようでわからなくて、これが自由なんだと考えると、逆に自分自身はかえって何もできなくなってしまう。そんな「自由になれない自分」にぶつかってしまって、これではわかったことにならないじゃないかという感覚を抱えていました。

頭で考えてもわからないんだったら、もう体を使うしかないんじゃないかと思いつめるころまでいまして、このときに社会学のゼミから生態人類学のゼミに移らせてもらいました。この人類学ゼミは、とにかく体を使うゼミで、「自分でおもしろいと思った場所に行って、最低3カ月は暮らしてみないと卒論を書かせない」というような（この時、私自身は実際には3カ月調査しなかったんですけれども）、そういった方針をとっているゼミでした。

問いはフィールドで見つけてこいと言うんですね。ぐずぐず言っていないで、とにかく自分が興味あるところに行って何かおもしろいものを見つけてこいと、背中を押されるというおしりを蹴られるような形でフィールドに行きました。「フィールドワークというのは人間関係の修行なんだ」と、このときの指導教官は「私自身、フィールドで何度まくらを涙でぬらしたことか」などと言って、ゼミ生たちのおしりをたたくんですね。ほかにも、「フィールドワークは調査とか研究以前に生き方の問題なんだ」みたいなことも言われていました。

じゃあ、どんなフィールドに行けばいいのかと考えたときに、自由とは何かでは漠然としすぎているので、「だったら自分で不自由だと思う場所に行って考えたらどうだろう」というアドバイスをもらいまして、九州の大学から大阪に出てきて、フィールド探しであちこち回りました。その過程でホームレスの人たちのテント村に行き着いて、大阪市内の三大テント村とか四大テント村と言われるような大きなテント村の一つで、延べ2カ月ぐらいの住み込み調査をしました。

ただ、これが失敗したフィールドワークだと当時は思っていました。卒論は何とかまとめたんですが、人間関係に振り回されて、調査者としてきちんとコミュニケーションをとって、データをとって分析したと言えるようなものではありませんでした。まだこの問いに答えを出せていない、というか研究を続けてみたいと思って大阪の大学院に進学しました。大阪に移り住んでしまうとテント村に住み込み調査するのはおかしいので、何か次の、丸々入り込んで、体を使って、どっぷりつかって調査ができるようなフィールドはないかと思っているときに、テント村の知り合いの人に、「飯場に入ってみないとわしらがホームレスをしている理由はわからないんだ」というふうに言われて、2003年に飯場へ入って調査をすることになりました。

この飯場というのは建設労働者の作業員寮で、実働1カ月の契約で入っても契約を終えるのに3カ月ぐらいかかってしまって、出るところにはほとんどお金が残らないか借金になってしまうような現状があります。「飯場というのはとても厳しいところだから、自分たちはホームレス生活でしのぐほうがまだましだと思えるようなところがあるんだよ」というニュアンスで、このときは言われていたのかなと思います。

そして飯場に調査に行くことになったんですけども、この当時の雰囲気、フィールドワークのブームみたいなことと関連して考えてみると、鶴飼正樹さんの『大衆演劇への旅』という本が、私の中ですごく印象に残った1冊でした。印象に残った理由の1つとして、まず、人類学者じゃなくて社会学者が書いた参与観察の本、エスノグラフィーの文献だったということがあります。

その社会学者が書いた参与観察の本なんですけれども、鶴飼さん御自身はスマートにエスノグラフィーを書いたわけではなくて、「こんなのただの日記だと言われてしまえばそれまでのものかもしれないけれども、この本は自分がようやく到達した私なりのエスノグラフィーである」というようなことを本の後書きで書かれていますし、後にこの本について、「これは私エスノグラフィーとでも言うようなものなんだ」とも表現されています。私も自分のフィールドワークの実感から問いをたてるようなものが書きたいと思っていたので、自分でもとりあえず日記を書いてみようというところから始めました。

まず、最初に入った飯場の2週間を飯場日記という形で、インターネットのホームページでまとめたんですね。それは割とおもしろいものが書けたんですけども、これをどう論文化したものかわからない。まずはわからないわけですね。

何はともあれとりあえず日記はおもしろいものが書けたから、この調子でおもしろい日記をどんどん書きためていけば簡単に論文が書けるんじゃないかと思って、続きの調査をするんですけども、最初書いた飯場日記ほど後のフィールド日記はおもしろくないんですね。というような課題に最初からぶつかってしまいました。

そもそも参与観察で論文を書くというのは、参与観察のみで書かれた論文はその当時余り多くなかったように思います。参与観察を行ったということが書いてある論文でも、それは予備調査としてであって、事実関係の把握ツールというような位置づけだったように思います。

参与観察で書くのが難しい原因の1つとして、データの扱いにくさがあるのではないかと思います。語りと違って参与観察のデータは、分析の対象としては切り離されていません。自分で考えていると、出来事の言語化が何度でもできてしまうし変わってしまうので、「これが完成形だ」とい

う区切りをどこでしたらいいのかわからないところがあります。どこまでがデータで、どこからが考察という区切りをどうやってつけて書いたらいいのかがつかみきれないということがありました。

実際には、この調査法の本（R. エマーソンほか著『方法としてのフィールドノート』1998年、新曜社）を見ると、データを書き換えたり、語り口を変えることは問題ないし、むしろそれこそが強みだなどというふうに推奨されています。ここに挙げているような本でも推奨されているようなスタンダードな方法なんですけれども、ただ、それをどういうふうにしていったらいいのかが、こういった本を読んでもよくわからないんですね。

こうした、テキストを加工してノートを書きかえていくときに、コーディング作業なんかがよく出てくる。オープンなコーディングをして、選択されたコーディングをしていくみたいなことが定番のテクニックとして出てくるんですけれども、コーディング作業のまねごとをしてみても、かえって意味がそぎ落とされてしまうような感じがして全く前に進めませんでした。というような期間が結構長くありまして、これを転換するきっかけになったのが、エピソード記述という方法論でした。

これは鯨岡峻さんという発達心理学の方が書かれた本で、『エピソード記述入門』（2005年、東京大学出版会）という本があります。この本のタイトルにあるエピソードという言葉聞いた時点で、何かこれは使えるんじゃないかという感じがしました。というのは、多分このエピソードという言葉は何か実感を伴った出来事、データに自分の感覚を含めて分析するというニュアンスが入ってたからだと思うんですね。（資料の）2ページ目の頭に引用してますように、鯨岡さん御自身も生き生きとした感じ、感情、思いを取り込んだ記述ができないかと考えてつくった方法論だということを言われています。

この方法論では、最初につけたエピソード記録、備忘録的な記録をメタ観察して、メタ意味みたいなものを探り当てて、最終的には理想の記述を練りあげるというものなんです。後で書いた日記がおもしろくないと思ったんだけど、ここのエピソード記述というスタンスに立てば、後の考察からおもしろいものに書きかえる余地があるというところでも、すごく救いがありました。フィールド日記をいったん書いてしまうと、それ以上のものは出てこない、そのときに書いた日記がおもしろくなかったら使えないんじゃないかみたいな焦りにとらわれていたんですけれども、まだ掘り起こす価値があるんだなと気づかせてくれたのも大きなポイントでした。

1つ懸念としてあったのは、これは心理学の方法論なので、社会学にそのまま持ってきていいのだろうかという疑問はあったんですけれども、「間主観性を考察するんだ」みたいなことを鯨岡さんが言われていて、図式的に整理すれば、相手の心と自分の心が何らかの出来事を介して通じ合うような場面について間主観性と言われているのだと思うんですね。この出来事ということを間に置いて、その出来事というのは社会構造とか制度とか、社会のあり方と関連しているわけなので、同じ図式のなかで、力点の置き方が心理学と社会学で違うんだというふうに解釈すれば、社会学で応用してもそう問題はないんじゃないかと自分なりの納得をして、このやり方でいくことにしました。

このエピソード記述というので、私自身はすごく救われたような感じがあったんですけれども、

これは誰にでもできるのかというのはちょっと怪しいなという気がしていて、実際、鯨岡さんも、「これは鯨岡さんの名人芸みたいなのじゃないか」みたいな批判を受けて、「そんなことはない」という意味でスタンダードな方法論を書いたと書かれているんですけども、やはりこれをやれるようになるまではそれなりにコツをつかむ必要があるし、データ量が必要だと思います。メタ意味を掘りあてるメタ観察にも結構時間がかかると思われるので、学位論文とか期限を切られた研究でやるのはリスクが高いんじゃないかという気がします。

そのような発見があって、とりあえず自分のデータを分析して論文に仕上げる道筋が何とかできたんですね。それから、これを博士論文、学位論文にするまでにクリアしなければならなかったことを整理したいと思います。博士論文の基本的な章立ては本の構成と一緒にですけども、博士論文は1章から4章が実態編、5章から8章が排除編という2部構成になっています。1章が飯場日記にあたる場所なので、一番最初に書かれた文章になります。実際に書かれた順番は、1章があって、5章、6章、7章を書いて、前半の4章、3章、2章と、ほとんど逆方向に書いていって、一番最後に第2部終わりの8章を書いたという順番になっています。

1章、5章、6章、7章というのは、合わせても4章にしかならないので、排除編だけでは博士論文になりません。ボリュームが全然足りていないというところで、1章、2章、3章、4章、前半にあたる場所をどう組み込んで、ふくらませるかが課題だったんですけども、博論の目的を「下層労働者を囲い込む労務管理のシステムである飯場の実態を明らかにし、飯場を通して現代日本における下層労働者の排除の構造とメカニズムを明らかにする」というふうにして、最後に「飯場の社会学」という形でくることで、ようやく学位論文として成立させることができました。

本の中でいくつかの章でテーマが重なり合っているところがあります。研究背景として、まず寄せ場の衰退があります。建設労働市場が変容していった寄せ場が衰退していると。その寄せ場の衰退の背景には、飯場の巨大化、飯場網の拡大、求人広告市場の発展などがあります。

それから、寄せ場研究の発展的継承という側面もあります。都市下層研究として蓄積されているものがあって、私の研究もその上にあるわけですけども、寄せ場が衰退した後に、寄せ場研究、都市下層研究で蓄積されたものをどう継承して発展させていくのかという課題がありました。

この寄せ場研究で蓄積されたものには、意味世界や文化の研究の蓄積と労働概念、勤勉と怠けをめぐる議論がありました。後半の排除編では、これらの部分の発展として研究史上の位置づけが可能でした。この勤勉と怠けという議論に着目して、相互行為と意味づけをもとに包摂・排除のメカニズムを解明するという形で論文に取り組むことができました。寄せ場の衰退というところについては、飯場の労働や生活の実態を明らかにすることそのものに意義を見出せました。飯場の変化が寄せ場の衰退に関係しているのではないかと言われていたんですけども、その実態はほとんど明らかにされていなかったもので、それを明らかにすることと、求人ルートによる飯場の違いを比較するという課題を入れることで、もう一つのテーマを盛り込むことができました。

最後に、博士論文全体の構成というところですけども、この点についても、この二つの課題の相互補完的な構成をうまく組み立てることができました。この寄せ場の建設労働市場の変容や飯場の実態という構造的なところと、労働者のコミュニティの中での支え合いみたいな現場のことが切り離された形で労働力の再生産を支えてるんだという図式でまとめることができました。

というふうに、幾つか幸運なことがあったと思います。飯場の実態についてはほとんど明らかにされていないので、ありのままに描くだけでも、とりあえずオリジナリティは担保されていた、飯場を誰も扱っていなかったから書きやすかったという面がありましたし、飯場の実態を明らかにすることが社会構造、構造的なところを明らかにする議論のかなり重要なポイントを占めていたことも幸運だったと思います。

また、私が最もやりたかったところは恐らく相互行為の分析になるんですけども、この相互行為の分析も、寄せ場研究、都市下層研究の関連でうまく接続させて着手できたということも大きかったと思います。

そういう形で博士論文をまとめて、いよいよ書籍化に当たっての修正をどのようにしたかというお話をしたいと思います。

この書籍化、先ほど荻野先生のご報告で、一般書を意識して書かれたというお話がありました。この『飯場へ』という本も、一般書として書いたわけではないですけども、一般読者も読めるようにという方針で、洛北出版と相談して完成させました。

インターネットの書店、アマゾンとかいろいろあると思うんですけど、そこで本のカテゴリーを見ると研究書とか一般書とか書かれていて、実際この本は一般書のカテゴリーに分類されています。一般の読者に読んでもらうためには、まず第1章の飯場日記、自分の実感から研究をスタートするためにと考えて書いた飯場の日記の部分を読んでもらえれば最後まで読み通してもらえははずだというコメントを編集者の方からいただきました。論文だと、序論のところの研究の目的とか研究の背景とか先行研究、方法論などをかなり書いてあるんですけども、そこは解体してしまって、はじめにとコラムに分割するというふうになりました。はじめにはスムーズに読んでもらって、すぐ日記に入ってもらって、そこではずみをつけて最後まで読んでもらおうという戦略で書き直しました。

そうはいつでも、やっぱり序論は結構大事なことを説明しているので、序論をまるまる抜いていきなり日記というわけにはいきませんでした。最低限の背景や用語の説明は残し、書き出しに、私自身が飯場での調査研究を始めるに至る個人的なエピソードを書き加えることになりました。ですから、自由とは何かという問いから始まって、ホームレスの人たちのテント村に入って、そこで失敗をして、みたいなことまで書かれています。おわりにでさらに書き足した部分もあります。

それから、一人称について博士論文では「筆者」にしているところを、全て「僕」に置き換えて統一しています。それも、「筆者」だと一般の読者にとっては読みづらいだろうということがまずあって、さらにこの一人称を使い分けてはどうかというアイデアも最初にはあったんですね。この日記の部分、データ部分は「僕」にしておいて、本文は「私」にするというふうにして、視点の複数性を表現してもいいんじゃないかというアイデアも提案されたんですけども、「私」で文章を書くことはふだんほとんどないし、ちょっと違和感があるので、全てを「僕」に統一しました。「僕」に傍点を振るか振らないかの微調整をするぐらいで、あとは一人称を僕にしても、不自然のないように文章を書き直す作業をしました。

本のあとがきで、「研究者共同体に向けた言いわけは要らないんだ」みたいなことを書いています。「この本に研究者共同体に向けた言いわけは要らないと思う」と入れたことで、「最初から最後

まであるべきスタンスを貫くことができた」ということを書いています。この「研究者共同体に向けた言いわけ」というのは、洛北出版の竹中さんがおわりにの草稿を読んだときのコメントで、「この部分が研究者共同体に向けた言いわけのように読めます」と言われたので、大幅に書き直したんですね。

研究者共同体に向けた言いわけというのを「一般の読者を意識して書き直した点は多目に見てほしい」という甘えでしかないというふうに考えれば、一般読者に対して失礼なわけですし、かといって研究者共同体に向けて書いていないという意味ではなくて、この形で書いていても、そのまま研究者共同体にも学術書として読んでもらえばいいんだと思い切れたということでもありました。

一人称を「僕」にするということは瑣末なことかもしれないし、私自身が思っているほど読者の方はひっかかってはいないかもしれないんですけども、「一般読者向け、研究者向けというのを分けないといけないんだろうか？」と引っかかるところがあって、「同時に、どちらにも読んでもらえるようなものとして出せないのかな」と考えながら完成させたという経緯がありました。

それから、(配付資料の)最後のところですけども、結局、私はすごく参与観察にこだわってしまったんですね。すごくこだわって、参与観察だけで論文書くのは難しいのではないとか、インタビューもすればいいんじゃないかと悩みましたし、実際インタビューしたほうが良いというアドバイスもたくさんもらっていたんですけども、結局、参与観察だけで書いているんですね。ここをうまく整理できているかわからないですけども、日記を書くところから始めたいという時点で既に意識はしていたはずで、何か日常と研究を地続きに思索を積み上げることがしたかったんですね。

研究者として「こういう目的でお話しを聞かせてください」といってインタビューをして、問いを立てて行ってインタビューをして、データを確保するという形ではなくて、全く同じではないですけども、やはり同じところで同じ生活をして、そこでわかることから研究につなげていくということがどうしてもしたかったんだと思います。それをしたかった理由の部分は、もう少し深める必要があると思うんですけども、そういった書き方をする中で、読者は飯場という特殊な世界の話をも自分自身に引きつけて理解できるんじゃないかという狙いがありましたし、他者の個別的な経験を通してこそ多くの人と問題意識を共有していけるんじゃないかという思いがありました。

ほかにも「誰にでもできること」という言葉をおわりににつけ加えています。ここは博論にはなかったところですね。誰にでもできることというのが軽視されているし、ただでさえすごく大事なことなんだということを強調したかったんですね。誰にでもできることというのは、1つには飯場労働者の仕事です。「わたらの仕事は誰にでもできる仕事や」、「かわりは幾らでもおるからな」みたいなことを労働者の人は言うんだけれども、じゃあ自分たちの仕事はそんな簡単なもので、かわりのきくものかと思っているかという全然そんなことはありません。そういうことを言いながら「楽をする工夫をしないとイケない」とか、「頭を使わんといかん」みたいなことをすごく強調するし、それを教えることにすごく意義を見出しているんですね。そういった労働者が普通にしている、誰にでもできるようなことを読み解くことで、この本の分析をしていったという自負があるのと、今言いましたけれども、本書の方法論というのも、すごく特殊な理論的なツールを使っているわけではなくて、日記を書いて、その日記をメタ観察する、メタ記述をするみたいなことをやって書いてい



るわけです。

研究者でなくても、何か分析するとか疑問に思ったものを解き明かすことはあるはずで、研究者がやった特殊な本、特殊な分析というのではなくて、何か答えを出す、問いに取り組むことのおもしろさみたいなことについても共感してもらえたらうれしいということがあって、「誰にでもできること」という言葉を最後に入れました。

そんな当たり前のこととか日常の平面に立ち返ることで、社会が見えてくるという側面があるのではないのでしょうか。自分自身の日常も、誰にでもできるやり方で理解できるんだという手応えを読者に感じてもらえたらうれしいという思いが込められています。

最後に、「私エスノグラフィーの向こう側」というところなんですけれども、鶴飼さんの私エスノグラフィー、『大衆演劇への旅』という本はすごく印象に残る本で、私自身影響を受けていると思うんですけれども、鶴飼さんがここまで到達するまでに抱えてこられた悩みとか積み上げられてきたものに対する敬意がありつつも、ここをゴールにするわけにはいかないわけですよ。私自身は私エスノグラフィーを書きたいわけではなくて、この私エスノグラフィーとしては飯場日記を書いたわけで、その先にどういうふうに物を書くかということがずっとひっかかっていました。私エスノグラフィーの向こう側にどうやったらいけるんだろうとずっと考えて、ようやく書けたという実感を持っています。

まだ掘り下げ切れてないところはたくさんあると思うんですけれども、なぜ参与観察にこだわったのかということを考えてみると、1つには寄せ場という場所が社会の周辺にあって、中心があって周辺があるみたいな社会のあり方が、ちょうど転換点を迎えていた時期とも言えると思うんですね。1990年代の後半というのはそういう時期で、かつての寄せ場のような場所が社会全体に広がっているみたいな言い方をされるようになったのも、このような時期でした。それを考えると、この参与観察から、私、自分自身とフィールドを切り分けずに重ね合わせてみるという方法をとったのは、それはそれで必然だったようにも思っています。

すみません、歯切れの悪い話になってしまいましたけど、とりあえず今日のお話としては、これで一旦切らせてください。(拍手)

○司会 ありがとうございます。やっぱり結構ラジカルな、すごい終わり方だったと思いますが、また、何か今聞いておきたいことがあったら手を挙げていただきたいと思います。ないようでしたら、コメンテーターの、まず阿部先生お願いします。

○阿部 すみません、甲南大学の阿部と申します。よろしく申し上げます。

今日はコメンテーターということで、後半の議論をなるべく盛り上げていくいろんなネタをちょっとずつ仕込みながら話をつないでいきたいなと思っています。

僕自身、今、甲南大学のほうに勤めてるんですけども、三浦先生との出会いはかなり昔になりまして、僕が2005年に「バイク便ライダーのエスノグラフィー」という論文を書いたときに、そのときは東京のほうにいたんですけど、東京のほうでは微妙な感じで対応されてたんですけども、関西のほうで三浦先生たちが研究会をやっていて、来てくれないかと言われて、当時、僕なんてまだ博士課程だったので、それはすごい大学の先生に呼ばれたのすごくうれしくて、そのエスノグラフィーに関する発表を関学にしに来たことを覚えています。

関西のほうではエスノグラフィーがすごく盛んで、今日も来ていらっしゃる前田拓也さんとか、当時知り合った金菱さんとか、今、東北のほうにいる。あと、山北さんが、今、日本大学にいますけども、という方が三浦先生の門下でいらっちゃって、積極的に若手でエスノグラフィーをそれぞれやって、すごく心強い思いをしたのを覚えています。飯場日記に関しても、そのときの飲み会で渡辺さんに渡してもらって、こんなことやってるんだということで、そのときからのおつき合いということになります。

というわけで、参与観察ということなんですけども、僕自身は、ちょっと僕の話をする、「バイク便ライダーのエスノグラフィー」という論文を書いたときに、1年間、バイク便ライダーの仕事をやって何に気づいたかという、最初は どうやってまとめればいいのか全然わからずに、ただひたすらやってたんですけども、一言で言うと疲れるわけですね。疲れて結構体も痛い。肉体労働というのはそういうもんですね。ただ、それを何か打ち消すような高揚感も同時にある。バイク乗ってる人とか運送業のお仕事をしたことのある人だったらわかるでしょうけど、その高揚感みたいなものが同時にあるわけですね。疲れるけど、何かそれを麻痺させるような高揚感も同時に感じる。これを何とか言葉にできないかなというのが、まず最初に僕がバイク便ライダーの参与観察をして思ったことなんです。

これは、例えば学部時代とかマルクスとか読むわけですけど、マルクスによると、やっぱり労働は苦役労働なわけですね。労働と余暇というのはくっきり分けられていて、労働というのは自己疎外であって、そこには楽しみがないと。人々は余暇で自己実現するみたいなことをマルクスは言っていると。違うなど、何か違うなど。

当時、周りを見てみても、ちょうど2000年代の前半ぐらいだったので、ITバブル、ベンチャー企業がたくさんあって、就職氷河期世代なので、当時まだブラック企業なんて言葉もできるかできないかというところで、そういったベンチャー企業でへとへとになりながら働く友達とかいるわけですね。でも、彼らはすごいハイになってるわけですよ。自己啓発セミナーとかに行き、何かみんなが気合いを入れたりしてるみたいな、そういう状況があって、これは何とかしなきゃいけないなと思って、その「バイク便ライダーのエスノグラフィー」を書きました。それが、その後、2006年に『搾取される若者たち』という集英社の本で新書になって、その後、本田由紀先生が「やりがい搾取」という概念をつくり出すという、ちょっとその話は後でしょうと思います。

要するにどういうことを言いたかという、参与観察というのは、最初はその意味がいまいちわかってなかったんですね。社会学者であまりバイク便をやる人はいないだろうという感じで始めただけだったんですけども、やっぱり改めて振り返ってみると、参与観察の意義は身体性への注目というんですかね、自分が体験することによって。僕の場合はバイク便ライダー、これは、まさに自分なんです。自分も言葉にできてないこと、言葉にできてないことを何かすくい上げることができるとするのが1つの強みかなと思います。

これはよくある話で、例えばバイク便ライダーたちの話を聞いていても、例えば、いわゆるブラック企業で勤める若者の話を聞いてみても、言葉ではいいことを言うんですね。言葉では威勢のいいことを言う、すばらしい職場です。すばらしい職場ですと云ってる人ほど悲惨という、大体そういう経験則があるんですけど、人はうそをつくし、いわゆるみえを張るわけですね。それを、厄介

なことに本人も気づいてない。要するに、言葉というのはどこまで信頼できるかという問題があるわけです。

これは例えば社会学だけじゃなくて、例えば表現、さまざまな作品で繰り返し描かれてることで。今、新作が公開されてますけど、クリント・イーストウッドの「アメリカン・スナイパー」という映画があって、あれは要するに主人公のマッチョな男は、俺は大丈夫だぜ、俺は大丈夫だ、アメリカのソルジャー。でも、明らかにどんどん体がむしばまれていく、戦争に行くたびごとに、いわゆる PTSD の問題ですね。これは本当に体と言葉が乖離してしまっているという問題。

または、皆さんも見たことあるかもしれないですけど、「アクト・オブ・キリング」というノンフィクションというかドキュメンタリーというか、そういったものがある、変わった映画なんですけど、虐殺者が出てくるわけですね。たくさん人を殺した人が出てくる。最初のうちは、俺はああやって殺したぜ、こうやって殺したぜと得意げに虐殺のシーンを語る。でも、ラストシーンでぐえっと嘔吐するシーンがあるんです。長い嘔吐をする。それはやっぱり言葉の中にある何かトラウマ的なものですね。それをつかむ。それが身体なんですよ。それが1つの参与観察の意義なのかなという気がします。

というわけで、僕はいつもこう思うんですけど、身体性に注目するということは、言葉ではあらわせないもの、言葉の先にあるものをつかむというふうにと考えると、実は参与観察、観察法とインタビュー調査がまとめて質的調査に分けられて、統計法が量的調査に分けられることがあると思うんですけど、僕はどちらかという統計調査と参与観察が近いのかなという気がするんです。インタビュー法はすごく言葉を信頼します。例えば参与観察をする人とか統計をする人は、多分言葉じゃなくて、その先にあるものをつかもうとしているという感じが僕はするんですね。なので、参与観察というのは、問題関心としては、どちらかというインタビュー法より統計調査に近いのかなという気がします。

いずれにせよ、参与観察の特徴としては、身体性に注目するということがあると思います。これは似たようなことだと思うんですけど、渡辺さんの場合だと感情という部分で言いあらわされていると思います。自分が感じる、体に何か感じるということですね。それはなかなかインタビュー法では使われないものであるということです。

2つ目は、結構長い期間入るので、誰の言うことが信頼できるかとか、集団内の人間関係がわかっていきます。これも先ほどの話で、どうしてもその後いろんなインタビュー調査をしたんですけど、ある施設に行く。施設に行くと、話のうまい人がぺらぺらよくしゃべるんです。話のうまい人がぺらぺらしゃべって、それを論文にする。でも、中の人からしてみると、わかってねえなど、こいつの言ってることは適当だよと。それを長い間いることによって、その人間関係を知ることによって、その言葉の奥にある人間関係というものを知る、これも1つの参与観察の強みなのかなという気がします。

あと、3つ目は、仲間というか知り合いになることで、より多く情報が引き出せるという点で、後の議論では、特に荻野さんには、やはり長い期間入る中でわかってきたこと、その参与観察の強みみたいなことをちょっとお話ししていただければと思います。

身体性の話に関しては、渡辺さんにちょっとお聞きしたいんですけど、この本はすごくおもしろ

くて、すげえなと思いつつ見たんですけども、やっぱりその後、書評がすごくたくさん出てる。大体書評に扱われてる部分は、後半の割と普遍的な話なんですよ。排除、差別の問題ですね。確かにここはおもしろいですよ。怠け者がいかにつくり出されるかみたいな話で、うちの職場にもあるわって感じで、すごくあるあるな感じでおもしろいので、多くの評者はそこに触れてるんですけど、僕自身は、僕のバイク便の論文に関してもそれがあるんですけど、すごく意味論的な解釈というか、ある種、今日のテーマにつながる場所なんですけど、社会学的な問題設定、理論化に乗せることによって、前半で描かれていた何かがこぼれ落ちてる感じがしてしまっただけなんです。それは多分、身体性の問題がある。後半がすごく意味論的な分析になっている、人間関係の話。確かにそこはすごくわかりやすいし、それがあったからこそ、この本は普遍的な意味を持ったと思うんですけど、その部分を渡辺さんにはお聞きしたいかなという気がします。

あと、調査結果の伝え方ということなんですけど、荻野さんがエピソードをつないでいくという話で解釈の多元性に開いていくみたいな話をしたんですけど、これは、想田和弘さんの『精神』というすぐれたドキュメンタリーがあるんですけど、いわゆる観察映画というやつですけど、それを思い出したんですね。想田さんは単に精神疾患のある方を観察してるだけだ、見てるだけだ、そこには解釈はないと言うんだけど、あの映画を見た方はわかると思うんですけど、明らかに意図があるんですよ。どうしてかという、編集してるわけですよ。たとえば一般の人が単にぱっと撮ってつないだとしても、2時間集中して見てられないですね。想田さんは編集してるんですね、あそこで。なので、多分何の意図もありません、観察してるだけなんですって、それは違っている。

ただ、がっちりとした理論の上に載っかっているようなストーリー性のあるものでも、それは違うというので、多義性の縮減と保存という話はその間を目指してるんだと思います。その部分、作品を執筆する上でどういった工夫してるのかということをお聞きしたいかなという気がします。

あと、これで最後なんですけども、これは渡辺さんのほうにお聞きしたいことで、これはちょっと社会理論の部分とつながるんですけど、飯場文化がカウンターカルチャーになり得ないという話はすごくよくわかる話で、例えばピエール・ブルデューという社会学者も、例えば明日をも知れぬアルジェリアの農民に革命的な展望を持つことは難しいというわけですね。あの人たちは日々生きるの大変だから、そんな革命的な市民になれるはずはないということをアルジェリア農民の分析から言うわけですね。これは現在のプレカリアートにも当てはまるということですよ。また、ウイリスの描いた労働者文化も同じことが言える。

ただ、若干マルクスの考えるようなプロレタリアートの連帯というのはちょっと強過ぎるかなと最近思うんですね。そこまで連帯できんなみたいな感じがするんですね。それはどうしてもネガティブな部分が出てきてしまうんです。排除とか差別という話になりがちだし、それは間違っていないんだけど、ただ、もう少しポジティブに捉えていいのかなとも思ったんですね。

これは、僕がバイク便を始めたときに初心者へのフォローってあったんですけど、すごく優しくしてくれるんです、先輩とかが。じゃあコーヒー買おうとか、地図はこうやって読むんだとかね。地図を読んでいるようではまだ初心者だみたいな、東京の地図をまず頭に入れろみたいなことを言われるんですけど、それって何かを理解して気づいてという話じゃなくて、もっと感情的なものだと思うんですよ。渡辺さんを見て、何か困った顔してるな、助けてやろうとか、僕みたいな

ひよろひよろのやつがバイク便のところに来て、何かこいつ頼りなさそうだから助けてやろうってね。これは多分、アダム・スミスが言うところの資本主義の前提になるようなセンチメント、いわゆる『道徳感情論』で描かれるような感情というものだと思うんですね。何かかわいそうだから、ちょっと助けてやろうかという。

最後、不当性の感覚、または気づきという渡辺さんの議論は、社会学的に言うとはすごくおもしろいし、そこが評価されてると思うんですけど、前半側の「飯場へ」を見たときに感じたほっこりする感じみたいな、何かおっちゃんが、渡辺さんが入ってきたところで、別にそれは無視してもいいわけですね。知らんわと言ってもいいわけです。これは有能性を確かめるためにしてると思うんですけど、それ以上の何か、ちょっとこいつかわいそうだから助けてやろうかというね、何かそういった感情みたいなものが、後半の部分すごくわかりやすい分、ちょっとその感覚、飯場のおっちゃんの優しさみたいな、すごくべたな話になるんですけど、そこがちょっと抜け落ちちゃってるかなという気がするんですね。そのあたりをどう理論化するかって、難しいことだと思うし、そんなものは連帯の代わりにならんのだという議論もあると思うんですけども、そのあたりちょっとお話を聞きしたいかなという気がします。

じゃあ、このあたりでコメントのほうを終わらせていただきたいと思います。後半につなげたいです。よろしくお願いします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

今、質問用紙にいろいろ書いてもらってると思うので、ぜひコメントーターの阿部さんにも質問があったらどんどん書いてください。それでは次、伊藤さん、よろしくお願いします。

○伊藤 長崎県立大学の伊藤と申します。よろしくお願いします。

すごいお三方の御発表、コメントがすばらしいものなので、私がトリを務めていいのか若干気が引けているところですが、頑張っていきたいなと思います。

ハンドアウトに関してちょっとコメントーターが用意すればいいのかなという感じだったんですが、印刷してこいという指示がなかったので、こんな感じで映させてもらいながらやっていきたいなと思います。どうも私のほう、こういうふうにしないとうまい発表はできないということもあるので、この画面を見ながら、こいつはこういうことを言ってるんだみたいなことをつかんでいただければなと思います。

ちょっといろんな雑駁な話、阿部先生のコメントに比べて雑駁な指摘になるとは思いますが、ちょっといろいろレジュメのほうから、特に渡辺さんのレジュメのほうから気になるフレーズとしてあったのが、「フィールドワークとは生き方の問題である」ということを御指摘されていたかと思えます。あるいは、研究と日常は地続きであると。私のほうでやっぱりこういうふうになってしまうわけですね。

御存じの方は、この中にいろいろいるんですが、私自身はもともとひきこもった経験があって、自助グループや当事者活動などのフィールドワークに参加して、いろいろインタビューとかもしながら研究をしてきたという人間ですので、どうも私というふうに表示されている記述が、ここのテキスト上だけの、結局は研究者としての私だけなのかなというところがやっぱり気になるわけですね。要するに、ここで書かれている、渡辺さんが指摘したような、日常、研究以外のところでの私

がテキスト上においてどういうふうにあらわれているのか、もしくは、あらわれてないとしたら、皆さん日常生活においてどのように隠されているのかというのがやはり気になる場所としてあるわけです。

やっぱり日常といったものを皆さん常に生活されているわけですが、自分はこういうふうな生活をしているんだということで、特に自助グループとかはそうですね。自分はこういうふうな体験をしたとか、こういうふうな経験をした、仕事場がすごい、ひどい大学にいろいろ問題あるよということは、結構そのネタが周りに感染して、自分もこういうことがあるみたいな話が共有できるところがいっぱいあるわけですね。

なので、フィールドワークが生き方の問題ならば、行ったフィールドワークによって私の生き方そのものにどういう影響が及ぼされたのかということも、もちろん研究者としてのプライバシーといったものがありますので、でも、差しさわりのない程度でお答えいただければ、私の今後の後学のためにもありがたいかなというところがありました。

あと、調査する私だけの問題にもとどまらないと思います。ここの会場なんかには、実は私のいろんな知り合い、別々の現場ごとで知り合った人たちが一堂に会っていて、そういう人たちの視線を集めている中で、いまここでどういうふうに分を振るまえばいいのかわからないのですごく悩んでるんですが。要するにフィールドワーク先でいろんな人間関係を持つわけですね。私の場合は、そこで出会った人と結婚して、今、佐世保と一緒に住んでいるわけなんですけど、そういうことを考えると、こういうスローガンがありますね。人生がフィールドワークみたい物言いをする人もいますけど、むしろフィールドワークが人生に取り込まれてしまって、のっとられてしまって、少なくとも現時点では何かよくわからないカオス的な状況になっているという、そういう実感が私のほうではあります。

こういう状況といったものを、特に今回発表されたお二方、どういうふうに分が見えるのかなということも気になりました。なので、フィールドワークということもしつつ、確かに自分自身の生活といったものも一方ではあるわけで、私自身はここまでやってしまって本当によかったのかなという半分モヤモヤしたものもありながら、私は生活しているというところですね。

私自身もいろいろ変化しているところもあります。いろいろこの1年で結婚して就職して、こうして見ず知らずの大学に行って、何かすごい大学に来たなと思ったら慢性疾患が見つかったりとか、いろいろ現在も問題が山積になったわけですが、そういう中でいろいろ自分の過去のものに対する見方も変わってくるわけですね。こういうものを、どういうふうに分ノグラフィーなり何なり考えていけばいいのかというところは気になったところとしてあります。

ちょっと前置きが長くなりましたが、簡単な自己紹介をしておきたいかなというところで、一応、私のほうとしては、卒論のほうで、今日司会をされている三浦先生のゼミだったわけですが、25年分の自分史を書いたわけですね。それを踏まえてインタビュー調査に出かけたり、フィールドワークをし始めたというのがあります。

そういう中で、いろいろ思うわけですね。最初は参与観察のものを書こうと思って投稿論文とかした経験があるんですが、なかなかうまい作品ができずに査読ではだめ出し食らったりしていました。ただ、その院生も今は大変な状況にあるわけです。現在の多くの大学院では何年かで論文査読

を通さないとそもそも博論を書く資格が与えられない。現在の大学教員の公募の条件はたいい博士学位が条件のひとつになってますから、博論書けなかったら就職もできない。そういう中で、そういったプレッシャーの中で、じゃあどうすればいいかということになると、参与観察だけでやっていくというのは、先ほどお二方も触れられていましたが、難しいところがあるわけですね、年月的に。数年で参与観察するという中で、どれほどのものが生まれるのかということがどうしてもよぎってしまう。リスクといったものを考えてしまうと、インタビューといったものを使って、その語りからいろんなものを考えていこうということになってしまったというのが、私のある種の反省点としてあります。

そういう中で、じゃあ就職したらしっかり腰を据えて研究できるかなと思ったら、そういうわけでもなくて、昨今の大学、とくに地方大では、人手不足の中で教育や管理運営業務を回さないといけないということもあり、研究にあまり時間が割けないという事情があります。もちろん、むしろこういう日常生活、研究生活の中での出来事といったものも、人生がフィールドワークであると捉えるならば、社会学者は記録して記述して、分析して解釈して、場合によっては社会に対して発信することもできるわけですね。それがさらに一般市民との対話のきっかけになる、そして現在の大学のあり方について一般市民の方も巻き込んで議論していくためのきっかけになるということを考えるならば、結構フィールドワークといったものの考え方、見方といったものをもう一度再考する必要がまた出てくるのではないかとこのところがあります。

……そうですね。ここもお二方の発表の中で触れられた中で、私のほうでもコメントしたいと思いますが、私の方でも博士論文を書いて、それを書籍化しようとする計画はあるわけです。ちょっと思ったのが、博士論文を書籍化する人は当然、特に社会学界限では多いわけですが、特に渡辺さんの本を見て私がすごいびっくりしたのは、この本のつくり込みようですね。装丁もすごくきれいですし、日記の部分はページの角のところがこういうふうな印刷、めくれている形のイラストが描かれてるとか、すごいつくり込みがすごいところがある。やはり、これは単に博士論文を書籍化したという以上のものが、物質的にこの出版物には含まれていると捉えることができるわけです。まさにこれは、この本自体がある種の芸術作品になってるといえるところは感じた次第ですね。まさに自分もこういうものをつくりたいなと思いつつ、できるかなということをおもいつつ悶々としている日々を過ごしているわけですが。

そしてもう一つ、荻野先生が触れているところと重なりますが、現場を伝える物語についてです。やはり居場所の実践といったものは、評価が難しいところがあります。私も佐世保でも不登校関係の居場所のほうに入らせてもらってますし、そういう中で、居場所に行っているんな話を聞いて、僕も話しながらやっている中で、こういう話を聞くわけですね。行政関係者の人とかと話をするとき、やっぱりここの実践はすごくすばらしいんだけど、この実践のすばらしさといったものをどういうふうな、例えば議会関係者とか一般市民に対して示せばいいかわからないと。

そういうときに私1つ思うのは、このエスノグラフィーというものが取っかかりにならないかということがあるわけです。書き手が考えたこと、感じたことを一般社会に対して示すということが、恐らくもっとそれが的確なものとしてエスノグラフィーにおいてできるのであれば、何か議会とかそういったところに対しての働きかけも有効になるのではないかと。そのためにどうすればいい

かというのは構想段階ですが、何かしらの可能性はエスノグラフィーの中には込められると思います。

もう一つ、論文と一般書の違いとして、やはり一般の人たちが読み通せるものとしてどうすればいいか。私もやはり参与観察したものを博論の中で少し展開したことはありますが、なかなかうまく書けない。作品化するのは難しい。ある種の書き手の技量といったもの、テクニックだけではないかもしれません。どうすればいいものを読者に対して伝えることができるのかといったところを考える必要が出てくるわけです。試行錯誤するしかないのかもしれないですが、何かしらのいいアイデアを、研究者間なり一般市民を巻き込んで共有できるような場ができるといいんじゃないかと思うところもあります。

ここから質問パート的なところに入りますが、私、佐世保の大学で社会学者としていますが、周りにいるのは公共政策の先生であったり経済学の先生であったりして、すごく孤独な中で日々を過ごしているわけですが、そういう中でいろいろ周りの先生と話をしていて違和感を抱くわけですね。やっぱり経済学とかそういうところは、効率的な、すごい短い時間で研究スパンのサイクルを回しているところもあるかもしれませんが、まずあまり本を見ていないですし、書かないですね。本を書くぐらいだったら英語の論文を投稿しろみたいな、そういうことも先輩から言われました。恐らく読ませたい対象、人として、一般の人々があまり想定されていないといったところと、そういったほかの社会科学に比べて社会学が持ち得るものは、やはり一般の人に対して読ませることができるということではないのかというところですね。

やっぱり行政関係者とか研究者に対して、確かに短い時間の中でこういった長大なエスノグラフィーを読んでくれるところは少しわがままめいたところがあるかもしれませんが、何かそういった考え自体を批判するようなものも、エスノグラフィー、フィールドワークといったもので闘っていくことができるんじゃないかというふうに考えることができれば私は考えているんですね。

なので、やはり我々社会学者は何で本を書くのかと。さっきもちょっと私の大学の話でも触れましたが、何でもみんなはちゃめちなことをしてるんだらうと思ったときに、私は観察者の立場としていろんな物事を眺めるということをしてるわけですね。こういった物事が記録されて分析されて、解釈されて説明されて、場合によっては一般に対して対話という、いろんな報告書であったりエスノグラフィーであったりして、そういった中で一般市民と対話するという、そういう一連の行為の中で社会学者は行動することができるということがあるわけなので。ここにも一般市民の人たち、私のフィールドで出会った人たちがたくさん来ていますが、確かにリテラシーは必要です、読み込むために。本を読むというのはすごく大変な作業であるわけなんですけど、こういった一般読者に対してもなれ親しんだ言葉を用いて物を書けるというのが社会学の特徴。一般の人と同じ土俵に立って物を考え対話していくことができるといったところが、社会学のエスノグラフィーの特徴としてあるのではないかと思う次第です。

そういう意味では、社会学はサイエンスかアートかみたいな古典的な議論があるわけですが、やはりその両方といったものを、これは本当に当たり前のことですが、考えていかなければならないんじゃないかなと思うわけですね。

そういう中で、最近の議論との接続を行いたいかなとも思います。社会学の中では、私の周りで



も、知ってる人でも身近な人でも、自分の問題を引き受けつつ社会的なものを考えるということをしている社会学者の人たちがいっぱい出てきてるわけですね、ここ最近で。そういった当事者経験を持った社会学者による研究であったり、あるいは『ソーシャルマジョリティー研究』という本の中で、綾屋紗月さんという発達障害当事者研究の方がいらっしゃいますが、彼女が言うには、自分が引き受けるべき問題と社会が引き受けるべき問題とをクロスして考えるということが必要なんだと。すなわち社会構造という観点と、当事者、生活者としての生き方の交錯したところに研究があるんだという発想が彼女にもあるわけですね。そういう中で、私は、フィールドワークやエスノグラフィーといったものが、自分が引き受けるべき問題と社会が引き受けるべき問題とをクロスして考える際に使うことができる有効なツールなのではないかというふうに考えることもできるわけです。

最後に、もう二つぐらい問題提起しておきたいと思います。

私は佐世保のほうで、一応、社会調査士の教育に携わっているわけですが、いろいろ思ったりするわけですね。こういうフィールドワークの授業で本当にいいだろうかと悶々としている中で、要するに単なる PBL 学習のツールとしか用いられていないという現状があるわけです。学生が、企業なり行政から与えられた課題に基づいて問いを組み立てて、ちょっと1週間ぐらい、あっても1カ月ぐらいですかね。学生だとそれぐらいでいいのかもしれないですが、ちょっと役場に、インターンシップなり役場の人に聞き取りなりをして研究をしていくわけです。でもそういった PBL 的なものだけだと何かもったない気がするわけですね。

三浦先生も授業の中で取り入れられてるみたいですが、レトロスペクティブ・フィールドワーク、自分の過去の経験といったものにフォーカスして何かフィールドワークしてみると、そういった方向もおもしろいのではないかと思いますし、最後にここのフロア、私の配偶者も含めてたくさんの方のフィールド仲間に来ていただいているわけですが、まさにフィールドワークやエスノグラフィーといった質的な研究の手法といったものは、統計といったものに比べても一般の市民の人たちに対して取り組みやすいものとしてあるわけですね。当然、たくさんブログでいろんな文章をアップロードしてる人もいますし、ツイッターでたくさん情報を書いている人もいます。そういった一般の人でも巻き込んだフィールドワーク教育といったものも考えてみていいのではないかと。それがまさに生き方、フィールドワークは生き方の問題である、あるいは日常と研究は地続きといったものを考えるための手段としてやはり必要なんじゃないかと思う次第ですね。

ちょっと投影のほうが消えたり写ったりで申しわけなかったですが、つたない報告、コメントでしたが、私のほうはこれで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。今から15分ほど休憩時間をとらせていただきたいと思います。もしもお手元の質問コメント用紙に書き上げた方は、早目にこちらに持ってきていただければありがたいです。それでは、4時5分まで休憩とさせていただきます。

(休憩)

○司会 お待たせいたしました。それでは、後半の、まずは先ほどのコメンテーターの方からのお二人へのコメントについて、荻野さんと渡辺さんに答えられる範囲で答えていただきたいと思います。

○荻野 それでは、一番初めに報告したということで、私から多少考えますところをお話しさせていただきます。

自分の報告自体もそうなんですけれど、すごく感覚的な物言いが多くなってしまって、そこがまだ言語化し切れていないというところがあります。ちょっとお答えるのもその範囲から出られないのかなというところを感じています。

まず、コメンテーターの方からいただきましたところで、阿部さんからいただいた部分で、言葉というものを持っている、ある種の怪しさみたいな部分につき合うというところの中で、かなり長い観察も含めたかかわりを持つということはどういう意味を持つのかということでした。本当に言っていたいただいたとおり、こっちは当然見られてるわけですが、こちらもいろんな行動とかかわるわけですね。例えばあの場面で誰がどう言ったとか、そうした答えなんかは逐一お互いの記憶の中にすり込まれていくというところがありまして、その中で話が聞けるかな、と思う人に声をかけていくことになります。

マス・メディアの支援機関への取材であることですが、テレビですとか新聞の記者さんが来ると、大体初めに誰かお話を聞かせてくれる人いませんかと聞くんですね、代表の方に。ですが、とくに秋田さんという方は、それは御自分で決めてくださいと言うんですね。それはいかにもありそうな話で、適当にまとめてほしくないという非常に強い意志もありまして、そうならないためには相手とそれなりに関わってくれということだと思います。私も同じように対応されたと思うんですが、やはり自分のかかわりの中でつくられていく関係、記憶の集積という中で、お互い言うこととか、お互い聞くことが、それまでの関わりの経験によってある程度裏づけを持ってしまうというんですかね、そうした部分がやはりあります。ただ逆に、そうした一定の関係を経た上で聞いているという安心感に乗り過ぎているというところもあるのかもしれない。それで言われたことをそのまま受け取ってしまうというところも私にはあるような感じもします。

ただ、確実にあるのは、確かに集団ですので、入っていくとまず前に出て話したがる方というのはいらぬですね。そこから入って、そこで聞いてという形でやらなかったことは、シンプルによかったなとは思いますが。ごくごく普通の話ですが。

あと、私が聞かれたわけじゃないですけど、興味深いなと思ったのは、身体性ってすごく大事ななと思ってまして、特に私の場合でいえば、本の中で書いた「安心」という言葉があります。たとえば言葉を発することなくある場にいるとき、話さなきゃいけないプレッシャーを感じるときと、感じないときがあると思うんですね。少し話しがズレますが、居場所にいるようなスタッフの才能って何かなといったら、話さないでそこにいられるということは、僕はスタッフの大事な才能だと思ってるんです。

これはすごく社会学者らしからぬ話なんですけれど、でも、一緒にいてプレッシャーを感じないとか、何か知らないけれど、みんな黙って一緒にぼうっとしていられるとか、何かそういうことを身体感覚的に、私はあの場において、ああ、これが大事なんだなと思うことがありました。そういういろんな経験というのは確かに極めて身体的なものだったなと思います。そこはすごく観察をしながら思うところはあります。

それが、例えば渡辺さんが言われたように、単にコーディングをして何かやっていけば話ができ

るかというところじゃなくて、やっぱりその場において、例えば気分という表現もあるかもしれませんが、何かカッとするような経験とか身体感覚みたいなもの、何でも信じ過ぎるのはいけないとは思いますが、やはりそこが1つ、膨大なデータの中で何を中軸にして自分なりの話を組み立てていくかというときに重要になるのかなと思っています。

あと、相田監督の「精神」のお話がありました。それから伊藤さんのコメントの中にもありましたが、結局、我々が書くエスノグラフィーですとかこういう質的な研究って、単純な「伝える力」があり得るはずなんです。格別のリテラシーがなくても、たとえば複雑な統計的知識がなくても読んでいただくことができるということも含めて、その伝えるということについての「技法」というとちょっと怪しいかもしれませんが、ここはマーネンの話だけではなくて、もっとちゃんと掘り下げべきなのかなと思っています。

いただいた質問の中に、ルポルタージュと社会学が研究上どう違うのかというのはずっとある問題だと思います。明確にお答えはなかなかできないし、それほど違わないと思っているところもあります。例えば自分も大学の学部ですとか大学院で質的研究についての授業だとか演習とかを担当してる中で、やはり何か訓練は必要だと思うんですね。どういう訓練かという、やっぱりどこかに「物語」についての訓練が必要だと思うんです。例えば相田監督の『精神』でいろんな印象的な場面がありますが、恐らく精神疾患や障害に関して、ある一般的に持たれるイメージ、いわゆる了解不能で非常に困った感じの人に関して一番最後にもって来てますよね。非常に強烈なキャラクターが出てきて、そこも含めて、多分非常に入念に編集されているのは間違いないと思うんです。要するに、我々があの了解不能性にどう向き合うべきかと最後に強烈な問いかけを残して物語が終わってるような私は印象を受けています。

そうしたやり方も含めて、どういうふうに読者を、途中で飽きられたり捨てられることなく徐々に徐々に話しに引き込んでいくか、そういうストーリーテリングみたいな部分もやっぱりそれなりに必要なかなと思います。

ただ、やはり我々は確かに単に小説を書くわけではないので、小説は難しいわけですが、やっぱり我々はエスノグラフィーである以上はデータに基づき、ということは決定的に守らなければいけないところですので、勝手に別に物語をつくるわけではもちろんないんです。しかし一方で、伝えるということの重さというのはすごい、伊藤さんも言われたとおり、すごく大事な部分だなと思っています。

ちょっと印象的な話をすれば、例えば居場所についてなかなか行政的に認められないという話が全国の支援者交流会の場でちょうど話になったときに、北海道でずっと支援活動されてる方が、そんなに誰もわかってくれないわけじゃない、何か数字にしなきゃだめだみたいにそんなに思わなくていいと言ったんです。彼が言ったのは、自治体の職員でも一緒に来てもらって、話して見てもらって、前に見た人が今どうなっているかっていう「物語」を共有することが大事なんだと言ったんですね。僕は非常に印象的な言葉で、確かに我々は、多分いろいろな情報がある種の物語の形で共有することによって、日々いろいろとやってると思うんですね。ですから、それは別に決してインチキでも何でもなくて、我々がちゃんと一定の物語を共有できるような形で物を伝えるということは、それは政策的にはいわゆる狭義のエビデンスではないのかもしれないんですけど、やはり大

事なポイントで、そこをどういうふうな形でつくれるかというのは、エスノグラフィーとかエスノグラファーというものがいろいろ取り組まなければいけないことなのかなと改めて思いました。

とりあえず私からは以上です。

○渡辺 まず、阿部さんからの質問について考えたいんですけども、2点質問いただいて、どちらも後半の理論化の過程で前半から切り落とされてる部分があるんじゃないかということだと思います。

1点目は、身体性にかかわるところで、理論化によって身体性がそぎ落とされていったんじゃないかという話ですね。阿部さんが問題提起なさったこの身体性というところが、私の本だと感情というところに焦点化されています。この身体性というテーマ、言葉については、興味を持ったり惹かれたりすることがあるんですけども、私自身はうまく扱えていないというふうに思っていて、うまく取っかかりがつかめていません。これの活かし方がよくわからないと。だから、自分は感情という形で使っているけれども、身体性というのをうまく理論に組み込まれていないという自覚があります。

本はテーマがあるので、そぎ落としていく部分があるというのは当然なんですけれども、身体性にダイレクトにかかわるところでは、友達がやっていたウェブマガジンにちょっと書いたことがあります。「日雇い労働者のつくりかた」という、日雇い労働に適應していくための方法みたいなことをレクチャー形式で書いたことがあって、それでは、重たいものを最初担げなかったのがこうすれば担げるようになったとか、けがをしてしまったときに、けがをどう乗り切るかみたいな話とかを書いているので、やっぱりこの本には組み込むことができないところを別の形で私は書いてるなと思います。

ほかにも、フィールドで大きな工事現場の外を覆ってる白い鉄板があるんですけども、あれを頭に載せて運ぶというのが僕はできなくて、これができるとできないというところで何か意味があって、「ほっこりするエピソード」そのものなんですけれども、そういう作品のもう一つの方向性があるんだろうなというのは思います。

もう一つの質問についてもそうで、カウンターカルチャーの話ですね。初心者へのフォローとか有能さへの志向みたいなものがあって、初心者に親切にするところには、単に有能さを確かめるためという以上のものが何かあるんじゃないかということでした。それは確かにあるはずで、部分的にはおわりで「共同性の原資」という議論をまとめたところで触れているんですけども、もう一つダイレクトにデータから扱ってはいらないなと思います。

ここについても幾つか語り方があって、この1月5日に西成区で、「日本一人情のある街、西成がなくなる!？」というシンポジウムがあったんですね。西成、釜ヶ崎のまちが、寄せ場としては衰退傾向にあるなかで、労働者のまちから福祉のまちになったと語られていて、西成特区構想に組み込まれたまちづくりの会議のなかで、あいりん総合センターが建てかえられようとしています。いろいろと対立があったり、議論が紛糾していたりするんですけども、西成の、釜ヶ崎の人情みたいなものが排除されてしまうんじゃないかという危機感が一部では持たれています。しかし、寄せ場の人情、釜ヶ崎の人情って一体何なんだろうということを1つ考えないといけないかなと思います。

僕のこの本の中で書いてあるんですけど、最初に寄せ場に朝行って、仕事見つけられなくて、全然知らない労働者が「仕事見つかったんか」と声をかけてきて、「見つからんのやったらわしが助けてやる」と言って引き回して、入る飯場を見つけてくれたというりエピソードがあります。その人自身が、「西成は情が廃れたいうけど、そんなことないんや」「わしも初めてがあつたからお互いさまなんだ」みたいなことを言うんですね。

そういうことを経験すると、ダイレクトに寄せ場の人情みたいなものを感じるんだけれども、知らない者同士がいきなり接近するような人情がある一方で、それが持続するかといったら持続しないですよ。また会うかどうかかわからないし、同じ現場で働くかどうかわかりません。実際その人と再会はしていないわけですから、そういう薄い人間関係だということもわかっています。だから本当にほっとかかっている部分もすごくあって、でも、時に接近するみたいな距離の取り方があるんですね。何かそういう持ち方をせざるを得ない寄せ場の人情みたいなものも、これからつかまえていかなければいけないんじゃないかなと思っています。

それから伊藤さんから問題提起いただいた「フィールドワークは生き方の問題である」とか、「日常と研究は地続きだ」という部分、自分自身への影響とかフィールドの人たちとの関係にどういう影響があるのかという話なんですけれども、日常と研究を地続きに組み立てたいとか、フィールドワークは生き方の問題だみたいなことをきちんと表明しておきたいという思いがあって、きちんと表明したつもりなんですけれども、でも、それがどういうことなのかについてはまだ整理し切れていません。まだ深めていかないといけないことなんだと思います。

というのは、やっぱりこの飯場の研究の中で日常と研究が地続きにあったと書いているけれども、この本の研究と日常はわりと切れてると思うんです。自分自身が同じ労働者という立場で組み込まれたという意味では地続きなんだけれども、飯場を出てしまえば、自分は普通にマンションに帰って大学行ったり授業したりしているので、そういう意味では地続きではない、結構遠い研究だと思っています。それに対して現在やっているのは、野宿者支援の現場とのかかわりでデータをとってるんですけども、そこでは本当に研究と日常、あと支援ですね、というのが、完全に切り離すというわけにはいきません。ここは研究としておいしいエピソードだから積極的に支援にかかわっておこうみたいな判断はもちろんしますけれども、そこから先は、「研究と関係ないから僕は引くよ」みたいなことは絶対できないわけで、だけど切れないところでかかわって行ってデータをとって、何を書いていけるのか、次に何が書けるのかということを、自分で大変だなと思いつつ模索したいと思っています。

だから、フィールドワークからの研究者のあり方として、支援とか運動というものと調査、研究みたいなものをどういうふうに練引きして、どういうものを描けるのかということをもっと追求したいと思っていて、日常と研究が地続きみたいなところはまだこれからの課題としても考えていきたいと思っているところです。

とりあえず以上です。

○司会 ありがとうございます。

それで皆様にいろいろ書いてもらったものがあって、結構長く、A4全面にばーっと書かれたものとかがあって、それについて個別に4人に聞きたいみたいなものもあり、なかなか一つ一つに丹

念に答えることが難しいのですけれども、ここでせっかく書いていただいたものなのですが、今度は質問をぜひしたいという、肉声でその部分をもう一回言っていたら、恐らく4人がぱっと理解できちゃうんだろうと思うんですね、読むのはなかなか難しく。ということで、このことだけは本当に聞きたかったという、言葉でもう一回質問していただけたらありがたいんですけども、自由に挙手していただければマイクをお持ちいたしますが、いかがですかね。

書いた上に言わせるという、何とも厚かましいような……（笑）。

○質問者 A ありがとうございます。すごくシンプルな質問なんですけれども、研究をやっている楽しいですかというのが1つ。何というか、論文になるとやっぱり作法であったり決まりとかいうのに、きつともともと自分がこうやりたいと思ってたけど、研究をやるにつれてだんだんとらわれていく中で、この研究をやっている楽しいと思えるときが何かあるかなというのが4人の方に質問というか、聞きたいことです。

○司会 最初に究極の質問が出てしまいましたが。

○質問者 A どなたからでも。

○渡辺 研究やって楽しいのかというと、すごい苦しいこともいっぱいあるので、自分はフィールドワークが生き方なんだから仕方ないと言い聞かせる場面がたくさんあります。何と答えたらいいのかわからないですね。楽しいことはもちろんありますけど、私は「書かないとわからない」というところがあるので、わからないところにずっとかかわり続けていればわかるみたいなふうにし、わかっていかなないので、とにかくフィールド日記はつけないといけないと思ってます。これは日記つけなくてもいいんじゃないかと思うようなことまで日記につけてると、「1日中日記を書きました」みたいな日記を書かないといけない日が来るんじゃないかというぐらい日記ばかり書いていて、すごく嫌になるときが最近あります。楽しいかと言われると、苦しいことはいっぱいあるんですけど、でも、そうやってデータをずっととり続けていった自分だからこそ、この地味な作業をやったからこそわかるんだ、つかめたなという実感のあるときは楽しいかなという感じですね。

○荻野 自分の先ほどの報告ではネガティブに語ってしまいましたが、論文の「作法」というんですかね、たしかに窮屈で苦しいというのがあるんですけど、私、それが意味がないことだとは全然思ってないです。そこはそこでやらなきゃいけないことだと思ってるんですね。やっぱり比較的コンパクトに話の骨格を明瞭にして、ぶれるとことなくちゃんと必要なデータをつけてということ、これはこれでやらなきゃいけないことだし、それをやることには意味があると思ってます。ですから、そこをどうにかやり切れるのだと思います。苦しいですけど、かなり苦しいですけどね。自分の悪い癖で、初め、ある程度構図考えながらもやたらと長く書いちゃう癖があって、その後縮めるのにもものすごく苦心惨憺するということは多々ありましたけど、それはそれで必要なことだと思います。

あと、調査過程の中で、何かそれなりのところに触れられるようになって、分かるようになったなと思うと楽しいんですね。だけど、色々な場面を長く観察もしてインタビューもしてっていう、ある意味ではぜいたくな経験をさせていただいた後に、違うフィールドにちょっと入り始めて、ここ何年かやってるんですけど、企業関係のところに行って聞き取りするんですけど、何か聞いた感じ

がしないんです。要するに、私がそこにおいて観察みたいなことをしながら、この企業はこういう世界だということをそれなりに把握した上で聞いてるんだったら、あちらも言うことを選ぶし、こちらも聞けるところがあるので、もう少し聞けたという楽しさがあるはずなんですね、もっと。ところが、それなりに新しいことを聞いてるはずなのに、何か聞けた感じがしないんです。それなりに芯をとらえた感じがしないんですよね。だから、そこは今のところ余り楽しくないなと思ってしまして。自分は調査でそれなりのところに踏み込めてるな、っていう感覚があると楽しめますね。あと、そういうデータではなくて、いわゆる言説分析的なことも好きで書くんですけど、そのときも、こういうことを書いてる過程で新しい解釈に気がつけたとか、行き着けたなと思えると、そういう瞬間は楽しいですね。そこら辺はやっぱり、たまにやってみてよかったみたいな思いをするところがあります。

○阿部 一応、社会学と、いわゆるルポとか、そういったジャーナリストとの違いというところで考えると、やっぱり社会学が好きかどうかは1つ重要なと思うんですね。理論を更新していくというのが調査の1つの意義だと思うんですね、究極的には。そういうふうにして考えると、僕自身で言うと、やっぱり時代はどんどん変化してくると。その中で、一世代前の社会学者が語っていた社会がずれるわけですよ。うまく現実を言えてない。そこに我々はフラストレーションを感じるわけですね。それで、それを何とかして自分たちの力で言いあらわしたいというのが基本的にはモチベーションにはなって、僕自身が「バイク便ライダーのエスノグラフィー」を書いたときは、その後、やりがい搾取という言葉になって、ヒットしたドラマの中で使われて、学生たちもみんな知ってたんですけど、何だっけな。そう、「逃げ恥」。要するに、社会学というのは社会科学なので、追試験とかできないわけですよ。こういう中範囲の理論が出きましたみたいな、こういう形で社会を説明できますというときに、前言った人はこの部分が違ってますという何か説明図式を出すときに、それを追試するというのは、世の中の人が、ああ、そうだよな、あるあるに近いですけど、これってそう言えるよねという形で、人々の認識枠組みを更新できたときが一番感動するというか、やりがいを感じるし、また、過去の社会学者、マルクスもデュルケームもそうだし、ウェーバーも、そういうふうにして社会と格闘しながらやってきたと思うので、やっぱり僕自身は同時代の問題と闘いながら、それで新しい言葉をつくっていくというところが社会学の喜びだし、そこが一番楽しいという気がしますかね。

○伊藤 質問ありがとうございます。

私のほうでも、学問する上で、このモデルを使えばこの現象が説明できる、すげえとか、この語りはこういうふうには解釈できるよねみたいなところで、発見があって喜びがあるというのはすごく共有できるところがあります。

ただ、もう一つ私の独特の立場からの発想になるかもしれないですが、基本的につらいからこのつらさを何とかしたいから研究したいというものが先にあったというのが私の事情です。なので、ひきこもった経験を何とかしたいという中でいろいろ物事を考えてきたわけですし、今回ちらっと思わず出てしまった話として、私自身は地方の苦しい状況にある大学に来ちゃったから何とかしたいという中で、いろいろ物事を考えたりするわけですね。なので、こういったつらさといったものを、言葉であったり、まさにナラティブとして表現するという方法もあるし、社会学として考えて

いくということ、幸せ、楽しいという実感を得ることも当然それはあるわけです。

そういう中で、さっき思ったわけですが、飯場の中で渡辺さんが書いてるような話って私の大学でもあるようなことで、要するに他大に転出されたりする先生が多い、つまり流動層が多い大学なので、大学関係の雑務的ないろんな仕事を知ってる人はすぐ抜けてしまうので、私も来年度からやらされますが、たとえば教務関係の大変な仕事とかも若手にすぐ回ってくるわけですね。それを何年もずっと繰り返している様であったり、そもそもやってる授業といえばPBL学習ばかりなので、これ、僕じゃなくても専門性とか関係なくできるよねみたいなことをやってるわけですね。そういったある意味で手元仕事みたいところで日常を過ごしていると、すごい渡辺さんの『飯場へ』を読みながら、何か自分の置かれた状況とつながってるなという、そういう実感を得て、ここで私たちはつながってるんだみたいな実感を得たときに楽しいと思うことはあると思います。

○質問者 A ありがとうございます。

僕もいろんな論文を書いてまして、エスノグラフィーの。ちょっと苦しくて2年ぐらい塩漬けになってるんですけど、何かちょっと今日は塩が抜けたというか、つらい中にも何か自分なりの楽しさとかやりがいがあるんだなというので勉強になりました。ありがとうございます。

○司会 ありがとうございます。

本当は今日こういう面々に来ていただいて、それでお話を聞くというときに、一番役に立つのは、今、書くのにすごく困ってる人がこれを聞いてもらったというのがあったので、そういう方がいらっちゃって、本当に今日はやってよかったなというふうに思います。

それで、まだ、さっきいっぱい書いてくださった方で、それをもうちょっと言葉でわかりやすく質問していただけると。

それじゃあ、そちらの今手を挙げていらっしゃる方、どうぞ。

○質問者 B 質問させていただくこと的前提として、まず三浦先生に1点確認をしておきたいことがございます。

荻野先生も渡辺先生も、著書を一般書として位置づけておられたと思うのですが、三浦先生がこのお二人の著書の位置づけというのを御存じの上で今日呼ばれたのかなということがまず一つ。

その上でなんですけれども、荻野先生、渡辺先生、お二人に質問したいのが、なぜ一般書として研究を作品化するとき、殊さらに私というものを持ち出されるのか、あるいは何が私と呼ばれて、テキストに目に見える部品として引きずり出されているのかというふうに言ってもいいのかもしれないです。それが裏を返せば、論文の中では私というものが、投稿論文というふうな言われ方、たしかこの中ではされていたと思うのですが、投稿論文の中ではなぜ私が引きずり出されないのか、その必然性がないのかということになるかと思えます。やっぱり読み手に向き合う読みやすさということを考えると、読み手に対する語り手としての私として、たとえば小説のような形で出てくるのが私というふうにも捉えられるとも思うんです。

けれども、阿部先生が御指摘されていた身体性のようなものも、恐らく私と呼ばれる中には混入している。果たして私というものに込められているのは、単純に読み手に向き合うときの読みやすさという次元のものだけなんだろうかということも1つ思います。



引きずり出されるという言い方は、私は好きなんですけれども、果たしてお二方は本を書かれるときに戦略的に持ち出したのか、あるいは、どうしても書いていて私と書かざるを得ないような引きずり出される感覚があったのか。引きずり出されるときには何らかの関係が、レリバンスがあるはずで、私というものがこのテキストを書く上で、一般書としてテキストを書く上でだされていたと思うんですけれども、その関係というのとはどのようなものかということを知りたいと思います。

○司会　すごく難しい質問でしたね。一般書なのか研究書なのかという区別を僕がしているという前提ですよ。僕は恐らくしていませんが、でも、これは読みながら研究書というふうなくりを大きく越えた、逸脱した書物だなという認識はありました。でも、それが一般書っていうのは全てそうじゃないから、だから、ちょっとわけのわからない本に出会ったっていう、それがやっぱり楽しみ、喜びみたいなものがあるって、そして今日のような場ができたというふうに、とりあえず言っておきます。

○荻野　ありがとうございます。大事な部分だと思います。うまく、やっぱり私もまだ、それこそ言語化できてないというか、整理できていないですけど。どこからお話ししたらいいかな。

一般書の形だから出てきて、研究論文だったら出てこないという部分で、何が違うのかということも確かにあると思います。これは実は阿部さんが初めのコメントのところ、観察とインタビューはすごく本来的には違うと、同じ質的研究とまとめられないぐらい違うんじゃないかというお話をされたことも関係があるのかなと思っています。たとえば、とくにルポライターになりますが、インタビューを突き詰めていく人のなかに、自分を完全に消して、語り手だけしかみえない形で書く人もいますよね。

ところが、参与観察したときには必ず、書いていくと私を出さざるを得ないんですね。ここはおもしろいところだなと思っていて、ちょっとスライドの中にも書いたんですけど、結局、起きてることについて意味をつけられる道具は自分しかないんですね、参与観察の中で。そこに何の意味を読み込むかといったときの道具は自分しかないんです。ですから、その部分を書きたいと思ったら私を引きずり出すしかないんですね。それが致し方なくなのか、戦略的になのかというのは、簡単に区別はつかないです。

ずっと長い付き合いがあって、どこから書こうとか、どうやって自分が捉えてきたその雰囲気や伝えようかと思ったときに、とにかく私を書かざるを得ない。自分というものがそこにどういふふうに入っているって、自分が何やったかということも含めて書き、相手の反応があり、私のさらに反応がありという中でしか、その場を表現できなかったんですね。

ところが、確かに投稿論文的なものの中で、余り自分の感覚でこうだったみたいな形だけで言うことは非常に心もとないんですね。そこを何でできないのかといったときに、1つは何かお約束的なものがあるのかもしれませんが、だけれども、それだけではなくて、字数みたいなものも結構大きいと思ってらるんですね。そこにおいて、自分の感覚っていうものの、それなりの確からしさみたいなものを描こうと思うと、結構字数が必要なんですよ、単純に。

観察の後に、その場にいた他の人と話す機会があったり、改めてインタビューしたりなんかする中で、さらに自分の感じ方や意味づけの確からしさみたいなものが補強されてくるところはあるんですけど、その起点にあるのはやっぱり自分でしかなくて、どうしてもやはり自分というものが

そこに引きずり出されると言えば引きずり出されるのだと思います。それは観察という営みと非常に深くかわりがあるし、それが本来的には方法論的にはすごく本当は大事な部分で、そこを使えないんだったら、本当は観察をやる意味はすごく薄れてしまうはずだと思います。

すみません、このぐらいにしときます。

○渡辺 ちょっと下手な答え方ができないなと思って、どう答えたらいいのかわからないですけど、筆者をやめて僕にしたところに関しては、別に筆者でいいんじゃないのかなと最初は思っていたし、僕にしたからといって本がわかりやすくなるわけではないだろうと思っているんですね、実は。

飯場日記を読ませちゃおうという思惑がそもそもありますし、飯場日記を発展させるという方向でこの作品をくみ上げているところがあるので、別にそれで間違っているとは思わないんですけども、分析を進めていくとというか、やはり研究的な書き方をしていくと別に私を出す必要はだんだんなくなっていくなと思っていて、論文の中で「筆者」と書くときは、「私」、主観的なものをほやかすために「筆者」という言い方をするわけですけども、「筆者」の部分で「僕」に置きかえていく作業の中で、単純に置きかえたら、これは文章としておかしくなってしまうものが結構ありました。そのときにどう書きかえようかと考えて、そもそも主語そのものを消しちゃってもこの文章は成り立つなというケースがたくさんありました。だから、「筆者」を消して「僕」に置きかえるわけでもなく、そもそも主語を消しちゃったところが結構ありました。

感情についても、8章はあえて感情的なところを極端に書いてるようなところがあって、その極端に書いた感情のところを、そこは調査者、渡辺の主観的な受けとめ方であって、飯場のほかの労働者は違うんじゃないかというような御意見をいただくことがあるんですけども、実際の分析そのものは、私自身が、僕が感じたときの感じ方ではなくて、やりとりを証拠に進めているから、実際は私を出す必要も感情を書き込む必要もないんですけども、8章は実験的に思い切り書き込んでしまいました。一番最後に書いたというのものもあるんですけど、意図的に書き込みました。

なので、何か私を入れなきゃいけないのか、殊さらに持ち出す必要があるのかと言われると、ないのかもしれないという気もするし、しかし、分析に向き合うときの前提として、私が、自分が、僕が、何か居心地が悪いとか、すごい嫌な思いをしたみたいなのを最初に出発点にして、そこにかかりついている社会的なものは何なんだろうという分析をしていくので、そこに私が出てくるのは、殊さらに出す必要はないけれども、出しちゃだめということもないだろうと思っています。その辺、もうちょっと整理しないといけないのかもしれないですけども、ちょっとこれは僕だけですかね、今回は。

○阿部 ちょっと渡辺さんの話でつけ加えたいんですけど、その話を聞いて渡辺さんのこの本のおもしろさがわかったんですけど、後半は完全に論文として書かれてるので、意味世界の分析になってる、論文で査読を通そうと思ったらこういう書き方しかできないので。ただ、その間、所々で出てくる渡辺さんの感情は、実はこれまで社会学の排除論が、またはマルクス主義的な、ある種の労働観みたいなのが見落としてたものだと思うんです。だから、何か感情が書き込まれてるところに新しいものを見出してしまうみたいなのがある。

○伊藤 さらに補足で渡辺さんの話に加えるとすると、僕という言葉を使うと、やっぱり日常会話

における私たちの作法に非常に近いやり方をとってるわけですね。なので、要するにエスノグラフィーは書いて終わるものではない。読者に読んでもらって、そこからさらにいろんなサイクルが始まって、もしかしたらこの社会が変わっていくかもしれない。そのきっかけになるためにエスノグラフィーというのは書かれる、そういう側面もあると思います。

そういう中で、単に読みやすいという、伝わりやすいですかね、コミュニケーションを本当にリアルにしているという、それを疑似的にしているような感覚が僕という用法には込められてるんじゃないかと思った次第です。

○司会 Bさん、どうでしょう。今のお答えで、とりあえずよろしいですか。

ありがとうございました。

もうちょっと時間があるので、書かれた質問をもう一回言葉にさせていただけるとありがたいですけど、いかがでしょう。

○質問者 C まず阿部先生に向けてなんですが、先ほど統計等を使い回すことと、インタビュー、言葉というものをどのくらい信頼するかによって切り分けられるんじゃないかというのは、非常に興味深かったんですが、一方で、よく言われる、よく言われるかわからないですけども、統計とフィールドワーク、渡辺先生のお話にちょっとあったような、フィールドの先で問いを見つけてくるようなやり方と、あと、例えば仮説検証で何らかの枠組みがあって、それで統計などで分析かけて検証していくというやり方があると思うんですが、統計と参与観察、そうやってある意味似たくくりに入れるときに、その帰納的、演繹的といっているのかわかりませんが、そういったところの兼ね合いというのはどうなるのかなということを伺いたいです。

皆さんにお聞きしたいのは、調査対象というものが多分参与観察する人はあると思うんですね。それらの具体的な話という部分が結構今回お話があったと思うんですけど、一方で、ある種社会的な問いというんですか。そういったものに、あるいはより大きな問題につなげての関心というものがあろうと思うんですけど、その対象と問いとの比重というんですかね、というものをどれぐらいでお考えになってらっしゃるのかなということをお伺いします。

もしかしたら、それにかかわることで、問いが先にあって対象を選定していくのか、あるいは対象に、それこそフィールドに入っていった結果そういう問いを見出していったのかということまで、あわせて伺えたらなと思います。お願いします。

○阿部 ありがとうございます。シンポジウムっぽくなってきました。

僕自身は、多分、うちの大学で社会調査士のG科目というのがあって、それを統計法と観察法とインタビュー法で分けてやってるというのもあるんですけど、1つ僕自身がこういうことを考えるようになったきっかけとしては、もちろんバイク便の調査もあるんですけど、介護施設に調査に行ったときに、建築の学生と建築の先生と一緒にいったんですね。建築の先生と院生は、1日中座って利用者の動線を見てるんですよ。ずっと座って書いてるわけです。社会学者はインタビューをしてるんです。特に最近の社会学に顕著なんですけど、意味の世界にとらわれ過ぎかなというのがすごくあるんですね。

この前の研究会でもコメントしたんですけど、もちろん意味世界を探究するのは社会学の1つの目的でもあるし、そこにおける秩序を考えるというのは1つの大きな社会学の役割なんだけど、で

も、やっぱり結局、僕が社会学科に入ったときに最初に読まれたのは、マルクスだったしフロイトだったしということを考えたときに、マルクスもフロイトも別に言葉については大して何も考えてない人たちなんですよ。フロイトは無意識について考えてたし、マルクスは下部構造について考えてた。それはレヴィ＝ストロースもそうだし、ゴフマンもそうなんですよ。なので、最近すごく、特に僕がいろいろと指導する立場になって院生の人たちの話を聞いてたりすると、意味にとらわれ過ぎてるとするのはすごく感じますね。コミュニケーションにとらわれ過ぎてるとい

でも、世の中って、社会なんてすごい小さなもので、その外側には世界があって、我々は身体に束縛されながら生きてるわけですよ。だから、そういうふうにして考えてみると、やっぱり統計とか観察は軽視できないというか、そこをつかもうとしているという点ではすごくおもしろいもので、ただ、じゃあインタビュー法がだめかという、僕自身もインタビューしてるので全然そんなことは言えなくて、そういったことを考えながらインタビューをするということも、例えば会話分析とかではもっと厳密になされてるわけですし、例えばルーマンを読めば「コミュニケーションは自律的に生成する」と書いてあるので、その人のことを本当に伝えてるなんてことは、ルーマン読みだったらそんなことは考えないわけで、そういった意味では、統計、観察とインタビューというのを分けると言う、インタビューやってる人には叱られそうなんですけど、そんな感じなものじゃないと。

演繹的か帰納的かという話は後半の話ともつながると思うんですけども、基本的には余り現場に行ってみつけるというのでは論文にはならないですね。とりあえず行って、バイク便ライダーを1年間やって、その間、仮説はずっと考え続けてるわけですよ。だから、よく演繹的にフィールドで問いを探すというのは、もちろん最初はそれでいいと思うんですけど、それは初発の問題であって、やっぱりそこで何か社会学的な仮説を見つけて、再びそれを検証していくという点に関して言うと、僕自身は社会学の論文なり社会学的な思考というのは帰納的であるべきだと思うんです。要するに、そうしないと過去の学説と切り離されちゃうので、最初は演繹的でいいと思うんですけど、そこで発見したものに関しては帰納的に論証していくことがすごく大切なことなのかなという気がします。

○渡辺 この『飯場へ』という本は修業の過程なので、本当は問いがないと論文にはならないと思います。最初から自由とは何かみたいな問いがあるけれども、その問いに正しい対象に本当に入ったのかどうかということは本当はわからないですね。

しかも、最初のホームレスの人たちのテント村の調査は、自分ではコントロールし切れなかったという苦い思いをしているので、「何も考えんとフィールドへ入ったらやけどするぞ」というのは実感として実はよくわかっていますし、かといって、じゃあ飯場へ入るときに十分な準備をして入ったかというところでもなくて、飯場に入るときは、むしろ帰納法を徹底させようと考えて入っていて、とにかく日記を面倒でもみっちり書こうと思って入ったんですね。しかし、やっぱり日記を書いたけれども、日記からどう論文にしたらいいかわからないという壁にぶつかって、最終的にエピソード記述というのを見て、これでいいのかと思って、ようやく道が開けたみたいないところがありました。

じゃあ、エピソード記述って何だったんだろうと思うんですけど、そもそも問いというのを難しく考えなくても、自分が最初に抱いた印象とか違和感みたいなものが既に問いになっていて、おもしろいと思ったところに行きみたいなの最初の指導もあったんですけども、素朴なところから始めて、対象との関係で自分の中で問いを育てていくわけだから、ちょっと比重と言われるとよくわからないですけども、同時に生まれてきているものと考えて育てていくのがいいんじゃないかなという気がします。

もちろん今やってるような調査だともう少し賢くなっているので、何か理論的な枠組みを意識しつつ、とりあえずこういう枠組みでことしの業績は固めておこうみたいな計算をしつつやるんですけども、本当にフィールドの人たちにとって、ホームレスの人たちですけど、排除される状況とか寄せ場がまちづくりに翻弄される中で、何を言うべきなんだろうということをまた別のところで考えて計算しつつ、対象と向き合いつつ、戦略的に問いを立てるみたいな感覚で今はやってるかなという感じです。

○荻野 ここについては、本当にそれらしいことが言えないというか、難しいですよ。でも、今お話があったとおりでと思ひまして、現場的に見出されるものということが、基本的には、順序的にはそこから立ち上げていくというのはある段階にあると思うんですね。一番初め入るときには何かないと相手に説明がつかないんですね、だけでもその後入って行って、その後は結構いろいろなものを見聞きし、その中でいろんな細かいことが浮かんでくると思うんです。ただ、じゃあ現場的に見出された自分なりの問いというのが、ここは難しいですけど、なんらかの社会学的とか社会的に意味がある問いになるのかというのは、それは何とも言えないですよ。これが自分の、ほぼこの年になると人生の反省ですけど、もっとちゃんと物を読んどくんだったという反省と繋がるところです。

つまり、対象とダイレクトにつながる文献だけではなくて、いろいろなものを吸収する中で、ここで見つけたものが、ある社会理論的なこととか現代社会についてのある種の問題に繋がるといふセンスがないとだめだと思ってるんです。自分はそういう意味で人生やり直したいと思うんですけど、やっぱりそこが両面ないと、現場で見つければ価値があるというのは余りにも素朴過ぎるし、かといって、頭でっかちで外側から持ち込めばいいというわけでもないんで、やっぱりその両面が本当にうまく作動して、現場的にも意味がある、社会理論的にも意味があるというところ、本当にうまいバランスで察知する素養というのが本当に必要なんだと思います。

例えば、研究法や調査法の授業してて思うんですね。院生さんや学生さんがインタビューとかせっかくとってきているんだけど、何でこのおもしろいところにもっと目をとめないと思うことって、多分、教員やった方は多いと思うんですね。せっかくだったらここをもっと突っ込もうよって。それはたまたま無駄に年取って、ある程度いろいろ読んでくる中で、学生さんとか院生さんよりは、何かこれはいいもの、きっと話になると思うことがあると思うんですよ。それは何かある種の蓄積なんだと思うんです。それを名人芸と言っちゃいけないと思うんですけど、やっぱりそういう素養というものはすごく大事だなと思います。

○伊藤 荻野先生の話を受けて、素養といったところを考えたときに思うのは、そしてさらにフィールドで出会った人の語りを聞いたりとか、いろんなところを見たりして思うのは、現場で出会っ

たこの人たちは社会学をやっているんだけど、社会的な思考をしてたりするというのがあるわけですね。

例えば身近なエピソードで言うと、自助会のこの場だと素の自分が出せるからすごい楽だと。一方で会社とか別の人たちのグループの中だと自分は仮面で演じてるから、すごいきつみみたいなことを言ったりする人もいます。そしてそこには、現場の人たちとある意味社会的な理論とといったものとの間の対話可能性が開かれてるといえると思うんです、ゴフマンであったりミードであったり。そういうのは、そしてこういう理論的なものに関しては、私たち社会学者はトレーニングして持っているわけなので、現場と理論とをつなげていくことができるんじゃないか。そこから何かさらに、当事者のレベルでもなくて、単に研究室にこもってる研究者が考えてる頭でっかちなものではない、現場との対話ということを通して理論をさらに高めていくような話といったものが何とかフィールドワークでできるんじゃないかということは私は考えていますね。

なので、最初の話、要するに日常と研究の比重の問題ですが、最初は私の場合だとそもそもひきこもりという対象に巻き込まれていたのが前提としてあるので、対象ありきで始まったわけですが、その後社会学者としてのトレーニングを積んでいくうちに、ここの生きづらさはこういう考え方でうまく説明できるとか、自分の生きづらさと周りの自助会で会った人たちの語りにつながる点が、社会的な物の見方をする事で説明できるみたいな点、そういう瞬間はあるわけですね。なので、どっちかの比重が大事かというよりも、まさにクロスさせていく。対象と社会的な問いをフィールドにおいてつなぎ合わせていくということが大事なんじゃないかなと感じています。

○司会 ありがとうございます。

これで大体もう予定の時間を超えてしまいましたので、今日はこれで閉めたいと思うんですけども、今日やってみて、やっぱりみんな胸の内をさらけ出してしゃべってもらって、研究者やってる人にそういう機会を持ってもらって、僕らもいろいろそれで勉強ができるなというのがよくわかりました。

それから、結局渡辺さんが言われたように、日常、本を書くことの、できるだけ易しい本を書くことと、それから何でも自分自身で「誰にでもできるやり方」で理解できてしまうみたいな、そのあたりの共通性というのは、結局フィールドワークも参与観察もインタビューも、これは研究者だけがやってるわけじゃないというところがあって、もう当事者の人たちはやっていますよね。参与観察ももうやって、そういう中でしのいできてるときだし、でも、当事者的に生きることもフィールドワークだし、そこでは当然インタビューも行ってるみたいな。

極端に言うと、僕が阿部さんにインタビューして、そして阿部さんから参与観察の話を知るといって、それはインタビューによって参与観察で得られた内容を僕は聞き出すことができると。そういう意味では、やっぱり必ずしも分けられるものではないなという気もしてて、本当にクロスさせるとか、演繹も帰納もみたいな、そういうふうなところで、僕らがそこで最終的にどんな問題に出会って、どんな研究をして、どんなものを書くかという、そういうところが共有されてきたのかなというところで今日は終わりにしたいと思います。

どうも長い間、ありがとうございます。(拍手)